

ISSN 0388-0176

中・四国 アメリカ文学研究

第45号

2009年6月

中・四国アメリカ文学会

中・四国 アメリカ文学研究

Chu-Shikoku

Studies in American Literature

No. 45

June 2009

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society

目 次

論 文

- 「アメリカン・ドリーム」の起源をめぐって
——F・スコット・フィッツジェラルドとジェイムズ・トラスロウ・アダムズ
.....杉 野 健太郎 1

Homeward Bound:

- A Comparative Study of Carver's Renegade Drivers with Kerouac's Characters
..... KURIHARA Takeshi 13

研究ノート

- 『天と地』にみる「帰化不能外国人」としての Le Ly Hayslip
.....長 井 志 保 23

第37回大会シンポジウム報告

- Hawthorneと19世紀アメリカ社会
.....中山 慶 治、城 戸 光 世
藤 吉 清次郎、上 田 みどり
西 前 孝 33

書 評

- スコット・スロヴィック／伊藤詔子／吉田美津／横田由理 編著
『エコトピアと環境正義の文学』
.....上 岡 克 己 49
- 池末陽子・辻和彦 著
『悪魔とハーブ エドガー・アラン・ポーと十九世紀アメリカ』
.....林 康 次 51

CONTENTS

Articles

- On the Origin of “the American dream”: F. Scott Fitzgerald and James Truslow Adam
..... SUGINO Kentaro 1
- Homeward Bound:
A Comparative Study of Carver’s Renegade Drivers with Kerouac’s Characters
..... KURIHARA Takeshi 13

Notes and Queries

- Assimilation and a Vietnamese American Woman in Le Ly Hayslip’s *Heaven and Earth*
..... NAGAI Shiho 23

Report of Symposium at the 37th Conference

- Hawthorne and 19th Century American Society
..... NAKAYAMA Keiji, KIDO Mitsuyo
FUJIYOSHI Seijiro, UEDA Midori
NISHIMAE Takashi 33

Book Reviews

- KAMIOKA Katsumi, HAYASHI Koji 49

「アメリカン・ドリーム」の起源をめぐって

— F・スコット・フィッツジェラルドとジェイムズ・トラスロウ・アダムズ

杉野 健太郎

序

「アメリカン・ドリーム」という言葉は、アメリカだけではなく国外例えば日本でも頻繁に使われるが、その概念すなわち意味内容が判然としない場合が多い。一般的には「成功の夢」あるいは「社会的・階級の上昇」が「アメリカン・ドリーム」の意味であると一応は言えるだろう。「アメリカン・ドリーム」に関する初の文化史的研究書を刊行したCullenは、ピューリタン、独立宣言、社会的上昇（“upward mobility”）、平等、家の所有、そしてハリウッドの夢の6つの意味を例示しているが、その定義しがたさを指摘するとともに最も包括的と思える意味も提示している。

None of the books I looked at makes anything like a systematic attempt to define the term or trace its origins; its definition is virtually taken for granted. It's as if no one feels compelled to fix the meanings and uses of a term everyone presumably understands—which today appears to mean that in the United States anything is possible if you want it badly enough. (Cullen 5)

「アメリカン・ドリーム」は少なくとも現代ではアメリカとは何かを示す大衆的アメリカニズムと呼んでも差しつかえないと思えるが、その言葉は、アメリカ文学の作家のなかでは、F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）、より特定すれば、彼の代表作『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）と結び付けられることが最も多いという点では衆目が一致する。実際に、F・スコット・フィッツジェラルドは、「アメリカン・ドリーム」という概念と頻繁に結び付けられる。例えば、2008年に刊行されたJohnson編の*Class Conflict in F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*は、イントロダクションの冒頭で、「アメリカン・ドリーム」という言葉がフィッツジェラルドと深い結びつきのあることを自明の理として論じている（Johnson 9）。また、2008年に刊行された『『グレート・ギャツビー』の読み方』のなかで、野間は、以下のように書いている。

この『グレート・ギャツビー』は、これまでたいていの場合、アメリカンドリーム（アメリカの夢）との関連で考えられてきた。タイトルになっている人物ギャツビーとアメリカンドリームとを関連させて考えるのが、本国アメリカだけではなく、アメリカの批評の圧倒的な影響下にある日本においてもふつうの解釈だった。（野間 7-8）

野間は、最近「タイトルのギャツビーだけでなく、語り手のニックにも注意をむけて、この作品を解釈しようとする考え方がでてきて」（10）それが同書の主な批評方法となっていることを指摘するが、この箇所以降3ページにわたって『グレート・ギャツビー』とアメリカン・ドリー

ムとの関係について書いている。

とは言うものの、Mattersonが1990年に、Deckerが1994年に、日本では岡本（173-74）が1997年に、渡辺がその文学史（115-25）で2007年に指摘した通り、「アメリカン・ドリーム」という言葉が最初に用いられたのは1931年である。また、フィッツジェラルドの作品では使用されたことはない。Deckerは、「アメリカン・ドリーム」という言葉が『グレート・ギャツビー』の国家的ヴィジョンの呼称に50年間も用いられてきたがそれは誤用だと、次のように書いている。

The term ["American dream"] was not put into print until 1931, when middle-brow historian James Truslow Adams used it in his popular history of the United States entitled *The Epic of America*. Thus, despite a half-century of literary criticism on the expression of the American dream in Fitzgerald's *The Great Gatsby*, the phrase is a misnomer when used to characterize the book's nationalist vision. (129-30)

「アメリカン・ドリーム」という言葉の初出は、「ミドルブラウの歴史家」ジェイムズ・トラスロウ・アダムズの「ポピュラーなアメリカ通史書」である。本論文は、「アメリカン・ドリーム」という言葉を初めて活字にしたジェイムズ・トラスロウ・アダムズ（James Truslow Adams, 1878-1949）ならびにほぼ同時代人であるF・スコット・フィッツジェラルドのテキスト、主にアダムズの*The Epic of America*（1931）とフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』（1925）を中心として、「アメリカン・ドリーム」という言葉の起源、およびその意味内容を再検証し整理し、フィッツジェラルドとりわけ『グレート・ギャツビー』研究およびアメリカ研究において「アメリカン・ドリーム」というテーマを研究する際の基礎固めを行なうことを課題とする。

I. ジェイムズ・トラスロウ・アダムズ

フィッツジェラルド研究のコンテクストにおいて「アメリカン・ドリーム」の初出がフィッツジェラルドではなくアダムズであることを初めて指摘したのは上述したように管見に入った限り1990年のMattersonである。だが、それを本格的に『グレート・ギャツビー』研究で論じたのは1994年のDeckerである。内外で唯一Deckerのみが、その言葉の初出がアダムズであることの情報源をNevinsだと明確に示している。管見に入った限りでは、アダムズの書簡集にメモワールが付いた書と呼ぶべき書、Nevinsの*James Truslow Adams: Historian of the American Dream*（1968）が最初で、次に1989年刊行の*Oxford English Dictionary*のSecond Editionということになる。¹

「アメリカン・ドリーム」というフレーズを最初に用いたアダムズは、Nevinsなどによれば、30冊を超える著書を書いた歴史著述家である。大下（14-21）によれば、アダムズの*The Founding of New England*（1921）は、ヴァーノン・ルイス・パリントン（Vernon Louis Parrington, 1871-1929）の『アメリカ史の潮流』（*Main Currents in American Thought*, 1927-30）とともに、19世紀に確立したピューリタン神話を破壊した代表的歴史書である。また、ピューリタン研究の泰斗であったペリー・ミラーは、その*Errand into Wilderness*（1956）において、F・J・ターナーのフロンティア仮説を批判する前にPrefaceで、H・L・メンケンとアダムズがピューリタンの偶像破壊を行ったことをやや皮肉を交えて指摘している。

さて、アダムズの「アメリカン・ドリーム」の意味の吟味に移ろう。アダムズの*The Epic of*

*America*は、タイトルの通り、太古の昔から同時代に至るアメリカの通史書である。アダムズは、そのPrefaceにおいて、heという人称を用いて自らを指しながら、この通史書の意図を記す。

He has desired rather to paint a picture, with broad strokes of the brush, of the variegated past which has made our national story, and at the same time to try to discover for himself and others how the ordinary Americans, under which category most of us come, has become what he is to-day in outlook, character, and opinion. (vii)

自らが南米に移民したスペイン人とヴァージニアに移民したイングランド人の子孫である (vii) 彼が行ないたいことは、アメリカ人の国民的物語を形作る多様な過去を描くこと、および、ふつうのアメリカ人がどのように現在のようアメリカ人になったかを見つけることである。Deckerの論もふまえると、自らを移民の子孫と名乗ること、およびこの箇所の“variegated”という言葉に、1920年代に吹き荒れたネィティヴィズム（移民排斥感情）への対抗意識がほのめかされていると思えてくる。そして、次の引用にあるように、そのアメリカ人は、世界の国々の人々とは異なるのである。くり返しになるが、彼が書きたいのは、他国人とは異なるそのアメリカ人の歴史と、アメリカ人がどのようにアメリカ人になったかである。

[H]e has grown increasingly conscious of how different an American now is from the man or woman of any other nation. He has been equally interested in the whole colorful pageant of the great epic which is our history, and in trying to discover how we became what we have become. This book was written from these two standpoints. (vii)

ここまでで彼の通史書の意図は、アメリカとは何かを記すこと、換言すれば、アメリカ性、アメリカニズムを明らかにすることだと言えるだろう。そして、次に、初めて「アメリカン・ドリーム」という言葉が登場する箇所に至る。ここで、彼は、この本において特にたどりたいたいのが、「アメリカン・ドリーム」の概念の起源だと述べる。すなわち、彼のアメリカニズム、アメリカの本質は、「アメリカン・ドリーム」なのである。特に以下の部分の最後に引用されている“life, liberty, and the pursuit of happiness”というフレーズで明らかだが、そのアダムズの「アメリカン・ドリーム」は、独立宣言の理念、すなわち、アメリカ建国の理念の中核である。

He has endeavored in particular to trace the beginnings at several points of entry of such American concepts as “bigger and better,” of our attitude toward business, of many characteristics which are generally considered as being “typically American,” and, in especial, of that American dream of a better, richer, and happier life for all our citizens of every rank which is the greatest contribution we have as yet made to the thought and welfare of the world. The dream or hope has been present from the start. Ever since we became an independent nation, each generation has seen an uprising of the ordinary Americans to save that dream from the forces which appeared to be overwhelming and dispelling it. Possibly the greatest of these struggles lies just ahead of us at this present time— not a struggle of revolutionists against established order, but of the ordinary man to hold fast to those rights to “life, liberty, and the pursuit of happiness” which were vouchsafed to us in the past in vision and on parchment. (vii–viii 下線筆者)

しかも、“life, liberty, and the pursuit of happiness”は、アメリカにおいては男女を問わずすべての人に保証されているものなのである。彼は、書く。

If, as I have said, the things already listed were all we had to contribute, America would have made no distinctive and unique gift to mankind. But there has been also the *American Dream*, that dream of a land in which life should be better and richer and fuller for every man, with opportunity for each according to his ability or achievement. It is a difficult dream for the European upper classes to interpret adequately, and too many of us ourselves have grown weary and mistrustful of it. It is not a dream of motor cars and high wages merely, but a dream of social order in which each man and each woman shall be able to attain to the fullest stature of which they are innately capable, and be recognized by others for what they are, regardless of the fortuitous circumstances of birth or position. (404 下線筆者)

アダムズの「アメリカン・ドリーム」は、「アメリカ独立宣言」(“The Declaration of Independence,” 1776)の中核、自然権の部分と同義と言ってよい。さらには、女性も明確に入っているので、セネカ・フォールズ会議の「所感宣言」(“The Declaration of Sentiments,” 1848)の観点も入っていると言えるだろう。Cullenがそのアメリカン・ドリームに関する本のイントロダクションで説明しているように、「アメリカン・ドリーム」の意味は現在ではさまざまな可能性があり、それで何を意味するかはアメリカとは何かに関するその人の立場や政治性によると言えるだろう。しかし、アダムズは、アメリカの本質をアメリカ合衆国建国の理念の中核に見るのである。あまりに有名で人口に膾炙しているが、アメリカ独立宣言の該当箇所を引用しておこう。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.

しかし、アダムズによれば、その理念は実現しておらず、実現はアメリカ人自身の今後の課題となっている。それは、OEDも引用する箇所でも明らかである。

American dream, the ideal of a democratic and prosperous society which is the traditional aim of the American people; a catch-phrase used to symbolize American social or material values in general;

1931 J. T. ADAMS *Epic of Amer.* 410 If the *American dream is to come true and to abide with us, it will, at bottom, depend on the people themselves. (OED Second Edition, Volume I, 397)

『グレート・ギャツビー』研究においてアダムズとの関係を初めて論じたと言えるDeckerは、Walter Benn Michaelsのネイティヴィズムとモダニズムとの関係に関する研究に影響を受けており、アダムズの「アメリカン・ドリーム」が同時代すなわち大恐慌後の1931年の状況の産物であるという点のみに注目し、その通時性を視野に入れていない。²

Adams makes no mention of Fitzgerald or *Gatsby* in his book, nor should he. The author articulates the fledging idea of the American dream through a vague concept of moral economics meant to address and subdue the imminent threat of class antagonism caused by the Great Depression. By explicitly appealing to a shared, rather than tribal, sense of the nation's dream, Adams steers clear of group conflict.

The point is that if we are to have a rich and full life in which all are to share and play their parts, if the American dream is to be a reality, our communal spiritual and intellectual life

must be distinctly higher than elsewhere, where classes and groups have their separate interests, habits, markets, arts, and lives. [411]

Adams's American dream is inspired by pre-war Progressive ideals of individual uplift and ethnic assimilation, values intended to assist readers in managing the crises of the Thirties. It comes as little surprise when, at the very end of *The Epic*, the historian offers a lengthy quotation from Mary Antin's optimistic autobiography of Russian Jewish melting-pot success, originally published in 1912. (130)

したがって、自らの論文のテーマであるセルフメイド・マンに合わせるためか、Deckerがアダムズ「アメリカン・ドリーム」の意味を、社会的経済的上昇あるいは成功（“upward struggle” [121]、“his entrepreneurial uplift” [125]、“virtuous uplift” [128, 129]、“virtuous success” [129]）といった意味で用いていることも誤りである。社会的経済的上昇およびセルフメイド・マンは、独立宣言に基礎を置くアダムズの「アメリカン・ドリーム」と同義ではなく、その結果と言えるだろう。

II. F・スコット・フィッツジェラルド

フィッツジェラルドの本を刊行する出版社であったスクリブナー社から、*The Epic of America* (1931) 刊行後の1934年以降にアダムズが本を続々と刊行しはじめたこと (Nevins 76) 以外には、アダムズとフィッツジェラルドには明確な接点はないようである。さて、次に1925年に遡って、アダムズの本より6年前に書かれた『グレート・ギャツビー』を扱おう。上述したようにDeckerは「アメリカン・ドリーム」という言葉が『グレート・ギャツビー』の国家的ヴィジョンの呼称に50年間も用いられてきたがそれは誤用だと指摘しているが、はたしてそうだろうか。まず、『グレート・ギャツビー』と「アメリカン・ドリーム」という言葉について確認しておこう。『グレート・ギャツビー』においては、“dream” という言葉は16回 (6, 34, 72, 75, 75, 91, 91, 105, 106, 115, 120, 126, 126, 137, 140, 141) 使われているが、やはり“American dream” という組み合わせは使われてはいない。デイジーを得たいというギャツビーの夢という意味で使用されている場合がこの16回の“dream”のうち11回である。このギャツビーのドリームが「アメリカン・ドリーム」と邂逅する場所があるとすれば、Tredell (39-42) も指摘するように、それは、やはりDeckerの言う「その本の国家的ヴィジョン (the book's nationalist vision)」(130) が表出するエンディングだろう。

Most of the big shore places were closed now and there were hardly any lights except the shadowy, moving glow of a ferryboat across the Sound. And as the moon rose higher the inessential houses began to melt away until gradually I became aware of the old island here that flowered once for Dutch sailors' eyes—a fresh, green breast of the new world. Its vanished trees, the trees that had made way for Gatsby's house, had once pandered in whispers to the last and greatest of all human dreams; for a transitory enchanted moment man must have held his breath in the presence of this continent, compelled into an aesthetic contemplation he neither understood nor desired, face to face for the last time in history with something commensurate to his capacity for wonder.

And as I sat there brooding on the old, unknown world, I thought of Gatsby's wonder when he first picked out the green light at the end of Daisy's dock. He had come a long way to this blue lawn, and his dream must have seemed so close that he could hardly fail to grasp it. He did not know that it was already behind him, somewhere back in that vast obscurity beyond the city, where the dark fields of the republic rolled on under the night.

Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter—tomorrow we will run faster, stretch out our arms farther. . . . And one fine morning—

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.

(140-41 下線筆者)

このエンディングにおいても“American dream”という組み合わせはやはり使われてはいないが、“the last and greatest of all human dreams”という言葉が使われている。昔アメリカの土地がそれへと「客引きした (pandered)」“the last and greatest of all human dreams”は、この小説において唯一「アメリカン・ドリーム」を指し示す。ここでは、三つの主体あるいはヴィジョンが融合していることに注目すべきだろう。ギャツビーを初めて見かけたときのギャツビーの位置 (20) に立つ語り手ニックは、ギャツビーのヴィジョン (視野) と、そして “Dutch sailors' eyes” のヴィジョンと一体化あるいは融合する。ギャツビーの夢 “his dream” および “Gatsby's wonder” は、“the last and greatest of all human dreams” および “wonder” と重ねられている、いや拡大されていると言えるだろう。なぜなら、格言を好み物事を一般化・抽象化する傾向 (Giltrow and Stouck 141) だけではなく拡大癖まであるのか、ニックは、デイジーがギャツビーの夢には及ばない、あるいはギャツビーの夢はデイジーという対象を超えるものと考えている。それゆえ、このエンディングでも、ギャツビーの夢を拡大したと考えられる。

As I went over to say good-by I saw that the expression of bewilderment had come back into Gatsby's face, as though a faint doubt had occurred to him as to the quality of his present happiness. Almost five years! There must have been moments even that afternoon when Daisy tumbled short of his dreams—not through her own fault, but because of the colossal vitality of his illusion. It had gone beyond her, beyond everything. He had thrown himself into it with a creative passion, adding to it all the time, decking it out with every bright feather that drifted his way. No amount of fire or freshness can challenge what a man will store up in his ghostly heart.

As I watched him he adjusted himself a little, visibly. His hand took hold of hers, and as she said something low in his ear he turned toward her with a rush of emotion. I think that voice held him most, with its fluctuating, feverish warmth, because it couldn't be over-dreamed—that voice was a deathless song. (75 下線筆者)

あるいは、エンディングにおいて、語り手ニックは、デイジーに受肉した (“the incarnation was complete” [87]) ギャツビーの夢そして彼の「驚異の念」 (“wonder” [72, 86, 141]) を肉から解き放ち、抽象化・一般化したとも言えるだろう。

しかし、それでも、アダムズの「アメリカン・ドリーム」が独立宣言の最も有名な自然権すな

わち基本的人権の部分を明確に指示するのに対して、「アメリカン・ドリーム」を指示する可能性がある“the last and greatest of all human dreams”の概念すなわち意味内容はあいまいなままである。それがアメリカとは何かという問いに対する答えとなるがゆえに、多くの批評家が論じ、このテキストがアメリカのキャノン中のキャノンになりえたということは想像に難くないが、それが指し示すものはいくつかの可能性が考えられる。佐々木が指摘するように、『グレート・ギャツビー』との類似性が指摘される小説の一つ「冬の夢」(“Winter Dreams,” 1922)には歴史がほとんど刻まれていないのに対して、『グレート・ギャツビー』には過去の歴史が満ちあふれている。古矢(3-9)に基づきながらもやや表現を変えれば、アメリカのナショナル・アイデンティティを支えてきたアメリカニズムとして、歴史順に、ヨーロッパからの入植以来続くフロンティア・スピリット、ピューリタニズム、独立宣言と憲法に具現化されたアメリカ建国の理念があげられるだろう。「オランダ人船員」に象徴され、ギャツビーの父親代わりダン・コーディが体現するフロンティア精神(フロンティアの夢)³。ギャツビーの「スケジュール」と「決意」(134-15)にも刻まれたフランクリン的なセルフメイド・マン神話に表出したピューリタンの勤労精神とアメリカ独立宣言の機会均等の理念。そしてまた、被差別的な立場にあった可能性が高いギャツビーの一時の成功に刻まれた独立宣言の機会均等の理念。しかし、Lehan(110)がすでに指摘しているように、フロンティアの終焉が1890年だと宣言されているので、フロンティア精神はアイロニックに響く。いずれにせよ、以上テキスト内で前方照応的に“the last and greatest of all human dreams”の指し示すものを挙げてみたが、“He [Gatsby] did not know that it was already behind him, somewhere back in that vast obscurity beyond the city, where the dark fields of the republic rolled on under the night.”が示唆するように、その他の夢も過去になるか潰える。『グレート・ギャツビー』において後方照応的に“the last and greatest of all human dreams”が指し示す可能性のあるものは、エンディングの最後の2行(“So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.”)で確立する、水上の推進力とでも言うべきアメリカニズムあるいはアメリカの国家的ヴィジョンである。それは、4年後に発表された「泳ぐ人たち」(“The Swimmers,” 1929)のエンディングで変奏され、ギャツビーは“an American girl”へと変化し、水泳の推進力をメタフォアとする「前向きな心」(“a willingness of the heart”)がアメリカの理念(“idea”)とされる(512)⁴。

結論

「アメリカン・ドリーム」という言葉を初めて用いたのは、1931年刊行のアダムズのアメリカ通史書*The Epic of America*であり、その意味は、独立宣言の理念と同等であった。また、その6年前に刊行された『グレート・ギャツビー』においては、「アメリカン・ドリーム」という言葉は使われないが、それを指し示す“the last and greatest of all human dreams”という言葉がエンディングにおいて使われていると言える。しかし、その“the last and greatest of all human dreams”の意味はあいまいなままである。前方照応的には潰えたさまざまな夢を指しうるが、後方照応的には未来への前向きな心の姿勢を指しうる可言えよう。

Deckerは、前述した通り、「アメリカン・ドリーム」という言葉が『グレート・ギャツビー』の国家的ヴィジョンの呼称に50年間も用いられてきたことは誤りだと主張する。Deckerはアダム

ズの意味での「アメリカン・ドリーム」が『グレート・ギャツビー』に適用できないと主張しているようだが、彼がアダムズの「アメリカン・ドリーム」を誤解または曲解していることもすでに述べた。また、その意味は多義的に解釈される可能性はあるが、『グレート・ギャツビー』の“the last and greatest of all human dreams”をアメリカン・ドリームと呼べることも上で示した。実は、Deckerは、もう一つの誤りをおかしている。それは、注3で論駁したが「オランダ人船員」にノーディシズム（北欧ゲルマン人優位主義）的な意味合いを読み取ることに加えて、以下の引用にあるように、ギャツビーを単純に白人だとみなし、『グレート・ギャツビー』をネイティブイスト的な、すなわち、移民排斥的なイデオロギーの強いテキストだと見なすことである。

Gatsby's upward struggle is inspired by traditional purveyors of middle-class success, such as Ben Franklin and Horatio Alger Jr. However, another less virtuous narrative of Gatsby's self-making unfolds, which connects our hero's business schemes to the tainted hand of immigrant gangsters. A story of entrepreneurial corruption, accented by the language of nativism, competes with and ultimately foils the traditional narrative of virtuous American uplift. In this way, Gatsby stages a national anxiety about the loss of white Anglo-Saxon supremacy in the Twenties... (121-22)

Fitzgerald's Dutchmen [on the final page of Gatsby], like William's Norsemen, bear the inadvertent mark of nativism specific to the Twenties. Nick's invocation of the Dutch sailor's vision of the New World adheres to the nativist logic of President Coolidge's April 1924 Message to Congress on the passage of the Immigration Bill: "America must be kept American." (124)

Deckerの理解と主張にしたがえば、大恐慌後の1930年代の産物であるアダムズの「アメリカン・ドリーム」は親移民的なもので、1920年代の産物であるノーディシズム的かつ移民排斥的な『グレート・ギャツビー』には適用できないということである。だが、そうだろうか。この小説は、「特権」(“advantages” [5]) にまつわる父からのニックへの忠告で始まるが、ギャツビーのdisadvantageは階級におけるものだけだろうか。実は、ギャツビーは、階級だけではなく、人種にもトラブルを抱えており、比較的新しい移民またはその子孫である可能性も高い。⁵ 確かに、『グレート・ギャツビー』のテキストは男性のテキスト (Suwabe) だと言える。しかし、Blazek and Glenday (3-4) が考えるような白人至上主義的なテキストではない。とりわけ移民とアメリカン・ドリームとの関係は、12年後のメモにおいて一層明確になる。Lehan (22-23) も指摘するように、フィッツジェラルドは、没後公刊されたメモ*Notebooks*において「アメリカン・ドリーム」という言葉を用いている。

I look out at it – and I think it is the most beautiful history in the world. It is the history of me and of my people. And if I came here yesterday like Sheilah I should still think so. It is the history of all aspiration – not just the American dream but the human dream and if I came at the end of it that too is a place in the line of the pioneers. (Fitzgerald, *Notebooks* 332; Brucoliが⁵付けた番号は2037)

“Sheilah”とは、晩年のフィッツジェラルドと暮らしたSheilah Graham Westbrook (1904-1988) のことである。したがって、このメモは、Sheilahとフィッツジェラルドが出会った1937年頃、すなわちアダムズの*The Epic of America*の6年後に書かれたと推測される。ちなみに、Sheilahはイギリスからアメリカにやってきたので、上の“here”はアメリカ合衆国を指す。ここでは、アメリカの歴史は、「アメリカン・ドリーム」ばかりではなく世界の夢、すなわち「すべての野望 (all

aspiration)」の歴史であるというアメリカ礼賛が見られる。また、Sheilahがアメリカへ来る前はポグロムを逃れて東欧からイギリスに移民したユダヤ人であることと最後の“pioneers”が重い意味を持つ。すなわち、アメリカの歴史とは、外国からやってきた開拓移民の野望の歴史、よってアメリカの夢だけではなく全人類の夢の歴史なのである。そうだとすると、フィッツジェラルドの「アメリカン・ドリーム」は、階級・人種（および性別）に関係なく見ることでできるものであり、未来に希望を託す点（あるいはアメリカン・ドリームは実現していないという認識）と階級ばかりではなく人種の不平等を中心的主題とする点においてアダムズの「アメリカン・ドリーム」と通底し、公民権運動、いや少なくとも作者フィッツジェラルドと同じくアイルランド系カトリックのJFKに接続するテキストとなるのである。

注

- 1 鈴木（1）は、『オックスフォード英語辞典』（OED）によれば「アメリカン・ドリーム」という言葉が文献上初めて登場したのは1939年のアーネスト・ヘミングウェイの作品『持つと持たぬと』（*To Have and Have Not*）であると書いている。この鈴木の記事には誤りがある。OEDによれば、ヘミングウェイの著作に“American dream”という言葉が用いられていることは間違いないが、その言葉が文献上初めて登場したのはアダムズの著作である。OEDが刊行されたのは1933年だが、1989年の第2版から“American dream”はエントリーされている。そのVolume Iの397ページには、ヘミングウェイとアダムズの例があげられている。ヘミングウェイは、真ん中のコラムに“1. a Belonging to the continent of America. Also, of or pertaining to its inhabitants.”の例として、“1937 HEMINGWAY *To Have or Have Not* III. Xvi. 232 *The Colt or Smith and Wesson...so well designed to end the American dream when it becomes a nightmare.*”という記載がある。アダムズの例は、“3. a. *Special Combs*”すなわち特別な組み合わせの例である。また、Cullen（4-5）とRather（xx）もアダムズが初出であることに異論はないようである。なお、管見に入った限りでは、American dreamをそのままタイトルとした文学作品は、エドワード・オールビーの*The American Dream*（1961）およびノーマン・メイラーの*An American Dram*（1965）とがある。
- 2 アダムズの「アメリカン・ドリーム」は独立宣言の理念に基づくものであるが、共時性もあることは否定できない。おそらくDecker（130）やNevins（90）が主張する通り、移民問題を強調するアダムズは、プログレッシヴ運動と親和性が高いだろう。また、彼は、同時代の諸問題、人間の隷属化、サラリーマン化、画一化（409）、今がフロンティア時代を終えた危機の時であること（412-413）、格差社会（414）、などを指摘している。
- 3 「オランダ人船員」にピューリタニズムを読み取るのは困難である。巽によれば、この「オランダ人船員」は1609年の秋オランダ東インド会社に雇われた英国人ヘンリー・ハドソン率いるハーフ・ムーン号の一等航海士ロバート・ジュエットをモデルにしている。また、Deckerは、“Nothing could be further from the Nordic inflection given to the national imaginary as it is expressed in Fitzgerald’s fiction [than Adam’s American dream]”（130）と書き、「オランダ人船員」にノーディシズム（北歐ゲルマン人優位主義）的な意味合いを読み取る。しかし、それは必ずしもそうと

は言えないだろう。なぜなら、“Dutch sailors' eyes” のオランダ人船員は、北欧ゲルマン人だと考えられるかもしれないが同時にアメリカに移住してきた人々のメタファー、すなわちアメリカ人全般とも考えられるからである。なお、ノーディシズムとは、GrantやStoddardが唱え1920年代にアメリカを席捲した優生学的人種思想である。

- 4 『グレート・ギャツビー』のエンディングのアメリカニズムの問題に関しては、拙論「スイミングとアメリカー F. Scott Fitzgerald と John Cheever の “The Swimmer”」(『SOUNDINGS』34 [2008年12月]、163-80) を参照のこと。
- 5 このことに関しても十分ではないと思われるが拙論で論じた。この問題に関しては Goldsmith も参照のこと。ギャツビーの人種の問題に関しては、別稿で詳論の予定である。

引用文献

- 岡本紀元「ジャズ・エイジと『アメリカの夢』の崩壊—フィッツジェラルド」、川上忠雄編『文学とアメリカの夢』(英宝社、1997年)、172-95。
- 大下尚一「ピューリタニズムの形成と伝統」、大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』講座アメリカの文化1 (南雲堂、1969年)、1-62。
- 大西直樹『ピルグリム・ファーザーズという神話—作られた「アメリカ神話」』、講談社、1998年。
- 佐々木隆「『冬の夢』から『アメリカの夢』へ—*The Great Gatsby*を中心に」、『同志社アメリカ研究』Vol.21 (1985)、53-66。
- 鈴木幹樹「娘たちのアメリカン・ドリーム—オルコットの『若草物語』再読」、里見繁美/池田志郎編『アメリカ作家の理想と現実—アメリカン・ドリームの諸相』(開文社出版、2006年、1-23)。
- 巽孝之「若きギャツビーの文学史」、『日本フィッツジェラルドクラブ ニューズレター』No.18 (2003年4月) 所収。
- 野間正二『『グレート・ギャツビー』の読み方』、創元社、2008年。
- 古矢旬『アメリカニズム—「普遍国家」のナショナリズム』、東京大学出版会、2002年。
- 宮本陽一郎『モダンの黄昏—帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』、研究社、2002年。
- 渡辺利雄『講義 アメリカ文学史』第I巻、研究社、2007年。
- Adams, James Truslow. *The Epic of America*. Boston: Little, 1931.
- Blazek, William and Michael K Glendy. Introduction. *American Mythologies: Essays on Contemporary Literature*. Liverpool: Liverpool University Press, 2005.
- Crunutt, Kirk. *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. NY: Cambridge University Press, 2007.
- Cullen, Jim. *The American Dream: A Short History of an Idea that Shaped a Nation*. Oxford and New York: Oxford University Press, 2003.
- Decker, Jeffrey Louis. “Gatsby’s Pristine Dream: The Diminishment of the Self-Made Man in the Tribal Twenties.” *Novel: A Forum on Fiction*, Vol. 28, No.1 (Fall 1994). Rpt under the new title, “Corruption and Anti-Immigrant Sentiments Skew a Traditional American Tale.” in *Readings on The Great Gatsby*. Ed Katie de Koster. San Diego, CA: Greenhaven Press, 1998.

- Fitzgerald, F. Scott. "Absolution." 1924. *The Stories of F. Scott Fitzgerald: A Selection of 28 Stories With Introduction by Malcolm Cowley* 1. Ed. Matthew J. Bruccoli. NY: Charles Scribner's Sons, 1989.
- . *The Great Gatsby*. 1925. Cambridge, UK and New York: Cambridge University Press, 1991.
- . *The Notebooks of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew Bruccoli. 1945. NY and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1980.
- . "The Swimmers." 1929. *The Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. NY: Charles Scribner's Sons, 1989.
- Goldsmith, Meredith. "White Skin, White Mask: Passing, Posing, and Performing in *The Great Gatsby*." *Modern Fiction Studies* Vol. 49, No. 3 (2003). 443-68.
- Grant, Madison. *The Passing of The Great Race; or, The racial basis of European History*. New York, Charles Scribner's Sons, 1916.
- Johnson, Claudia, ed. *Class Conflict in F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*. Farmington Hills, MI: Greenhaven Press, 2008.
- Leehan, Richard. *The Great Gatsby: The Limits of Wonder*. New York: Twayne Publishers, 1995. リーハン『『偉大なギャツビー』を読む』伊豆大和訳、旺史社、1995年。
- Matterson, Stephen. *The Great Gatsby: An Introduction to the Variety of Criticism*. London: Macmillan, 1990.
- Michaels, Walter Benn. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham and London: Duke University Press, 1995.
- Miller, Perry. *Errand into Wilderness*. 1956. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981. ミラー『ウィルダネスへの使命』向井照彦訳、英宝社、2002年。
- Nevins, Allan. *James Truslow Adams: Historian of the American Dream*. Urbana, IL: University of Illinois Press, 1968.
- Rather, Dan. *The American Dream: Stories from the Heart of Our Nation*. New York: Perennial, 2001.
- Stoddard, Lothrop. *The Rising Tide of Color Against White World-Supremacy*. NY: Scribner, 1920.
- Tyson, Lois. *Critical Theory Today: A User-Friendly Guide*. NY: Routledge, 2006.
- Tredell, Nicolas. *Fitzgerald's The Great Gatsby*. NY: Continuum, 2007.
- Suwabe, Koichi. "It's a Man's Book': Fitzgerald's Double Vision and Nick Carraway's Narrative/Gender Performance in *The Great Gatsby*," *Studies in English Literature* 46 (2005). 157-73.

付記： 本論文は、日本スコット・フィッツジェラルド協会（2008年10月11日、九州大学）におけるミニシンポジウム「フィッツジェラルドと映画」（パネラー：塚田幸光、関戸冬彦、杉野健太郎）で読んだ「F・スコット・フィッツジェラルドとアメリカン・ドリームのゆくえ」の冒頭の部分の再検討であり、日本アメリカ文学会中部支部大会（2009年4月26日、名城大学）における同タイトルの発表の前半部分を論文化したものである。

On the Origin of “the American dream”: F. Scott Fitzgerald and James Truslow Adams

SUGINO Kentaro

“The American dream” is a familiar phrase not only in the United States but also in foreign countries. Although the meaning, origin and history of this phrase are not very clear-cut, it has been connected to F. Scott Fitzgerald, especially to his American masterpiece, *The Great Gatsby* (1925). However, it is true that Fitzgerald has never used the phrase in his stories. The phrase, as pointed out in the 1990s by Fitzgerald critics, was not put into print until 1931, when historian James Truslow Adams used it in his popular history of the United States, entitled *The Epic of America*. My reexamination clarifies that Adam’s “American dream” is his answer to what Americans are, that is to say, his Americanism, based on the founding ideas of the United States of America, or to be more precise, the most famous part of the Declaration of Independence.

Fitzgerald only once used the phrase in his notebook probably written in 1937, but never used it in his stories. However, “the last and greatest of all human dreams” in “aesthetic contemplation,” the ending of *The Great Gatsby*, refers to or is a synonym for the American dream, though its meaning or concept is obscure and equivocal. The “last and greatest of all human dreams” can refer to many Americanisms or American myths anaphorically within the text. Those Americanisms, however, lost their meanings within the text. It cataphorically can refer to mind’s forward-looking attitude, which transfigures four years later into swimming drive as a metaphor for “a willingness of the heart” in another short story. Although Jeffrey Louis Decker maintains that the phrase is a misnomer when used to characterize *The Great Gatsby*’s nationalist vision, we can discuss the American dream in the text’s own sense.

Fitzgerald’s *The Great Gatsby* begins with his father’s advice on “advantages,” which Nick has been turning over in his mind. Gatsby seemingly suffers from the only disadvantage: lower class birth, but it is not an exaggeration that the text insinuates his trouble with race many times. Consequently, Adam’s “American dream” and F. Scott Fitzgerald’s have two disadvantage themes in common: class and race. It turns out reasonable to put these two American dream in the stream of human natural rights originating in the founding ideals of the United States, to put it differently, between the progressive movement and the Civil Rights movement.

Homeward Bound: A Comparative Study of Carver's Renegade Drivers with Kerouac's Characters

KURIHARA Takeshi

Introduction: Similarities between Carver and Kerouac

American cars are intimately related to the counter culture movement of the 1950s and 1960s. As Toby Manning points out that "The man behind the wheel was a glamorous outsider, beyond the reach of women, family or law...heroic, yet dangerous" (33), cars and the youth culture are linked to the desire of getting away from society. Jack Kerouac's works are possibly the most appropriate examples of this cultural tendency. In *On the Road* (1957), Kerouac's characters desire to discover an alternative to conventional ways of living, as the writer himself set out on a cross-continental drift in order to escape from society.

It is not widely known that Raymond Carver, who was mainly a writer of domestic milieu, in fact had much in common with Kerouac, a writer broken off from society. Sharing the general atmosphere of the culture of discontented youth in the 1950s, Carver embraced an ambition to depart on an adventurous journey, leaving behind society and family. He planned to reach South America in a beat-up old car with his friends and they indeed set out for the Amazon in search of diamonds in 1956 (Maryann Carver 37). This expedition of Carver's sheds light on an unfamiliar aspect of his self as a reckless youth.

As Maryann Carver, the first wife of Carver's, says, on the other hand, "At the same time [Carver] wanted me, and he tried to juggle these things forevermore, really" (Halpert 57). Carver could not become reckless enough to be a social outsider and totally cut bonds with his family and his girlfriend. She also testifies that he said, before his departure, "The only problem is [. . .] I surely am going to miss you" (Maryann Carver 38). This statement reveals that Carver harbored an irresolvable inconsistency between his wish to be a renegade on one hand and to be a good boyfriend on the other.

In this study I will focus on Carver's works that deal with seemingly renegade drivers, as it can be said that his driving characters reflect Carver's oscillations between his attachment for society and his aspiration for a bohemian lifestyle. Before we analyze Carver's bohemian drivers, however, we will carry out a comparison between Carver's and Kerouac's lives in order to see how the two writers' obsessions with social identities affect the general tone of their works. Although an easy identification of characters with the author should generally be eschewed, both Carver and Kerouac have been assumed to be autobiographical writers and therefore it will help us to understand their works if we take their actual lives into account.

I . Fathers, Mothers and a Traditional Sense of Social Identity

In addition to their aspirations for an unrestrained lifestyle on the road, both Carver and Kerouac harbored an attachment for home based on a traditional sense of social identity. Before studying how their obsessions with family and home are reflected in their literary works, let us briefly review their notions of family and society.

In Carver's minimalist fiction in general, the social circumstances of contemporary America are limited to an aggregate of fragmentary descriptions of families, the basic unit of society. In this sense, Carver's society centers on the idea of family and home. The social identities of most of Carver's characters, therefore, are established on their connection to their families. The reader should also note that, confined by family and home, many of Carver's characters obsessively adhere to self-conscious gender identities. Carver himself, recalling the time when he was suffering from alcoholism, once remarked in an interview: "For all intents and purposes, I was finished [. . .] as a viable, functioning adult male" (Weber 88-89). Considering this remark, in which he judges himself with reference to male social codes rather than to moral standards for human beings in general, it is natural to assume that his notion of self is foremost a gendered identity.

In short, Carver's society, mostly presented in terms of family and home, is the place where the characters, mostly male, confirm their social identities by performing a male gender role. Tess Gallagher's statement confirms this interpretation of Carver's idea of society: "His characters, whether alone or within marriages or on the periphery of family, have compulsions which arise from the sheer need to be included or remembered" (Gallagher, "Carver Country" 13-14). Carver's and his characters' obsession with domesticity mirrors their desire to be recognized as functional components of society and family, and, simultaneously, their tremendous fear of losing their social identities. Carver's dilemma between taking the Amazon trip and his tie with Maryann is an apt example of his fear of losing his social identity as a part of family and society.

Carver's attachment to his social identity seems to have derived from his familial circumstances, especially his close relationship with his father, "whom [Carver] loved the most in all the world" (Maryann Carver 5). In an essay entitled "My Father's Life," Carver discloses that his father moved from Arkansas to the West, looking for jobs during the Depression (Carver, *Fires* 13). Although the Carvers were always struggling to make ends meet, Carver's father "was always the loving bulwark of his family and a steady breadwinner" by holding his job at the Cascade sawmill in Yakima (Maryann Carver 26). Considering the closeness between Carver and his father, Carver's characters' obsession with their identities as family men percolated from the author's own sense of responsibility as the head of household, which he inherited from his father.¹ Possibly as a result of the closeness between Carver and his father, Carver discloses his concept of the ideal patriarch based on America's traditional virtues of hard work and self-reliance in his essay, "Fires":

For years my wife and I had held to a belief that if we worked hard and tried to do the right things, the right things would happen. It's not such a bad thing to try and build a life on. Hard work, goals,

good intentions, loyalty, we believed these were virtues and would someday be rewarded. (Carver, *Fires* 33–34)

Interestingly, Kerouac, despite his well-known bohemian lifestyle, also harbored a devotion to a decent, conventional family life. Various autobiographical accounts of Kerouac's life reveal a spiritual attachment to his father and to the traditional male responsibility as the head of household, which his father embodied. Kerouac's father worked as a printer and tried hard, if not quite successfully, to hold his family together during the hardship of the Depression as Carver's father did. In Kerouac's biography, Gerald Nicosia asserts that Kerouac "believed in man's role as the head of the family, as the ruggedly honest, stoically suffering breadwinner [. . .], the role personified by his father" (154). In terms of the son's admiration of his father, Nicosia also maintains the following: "Jack immensely admired his father's strength. His father was his masculine ideal, and it troubled Jack that he hadn't yet been able to live up to him" (160).

Another example of Kerouac's traditional moral standpoint is his embracing of the notion of the ideal marriage, as described by Steve Turner: "the ideal of a monogamous marriage and a happy home had remained with him. He was particularly vulnerable to these dreams of a conventional family" (117). Although Kerouac's father played a great role in the formation of Kerouac's manhood and his traditional sense of male duty, his notion of perfect marriage can mainly be attributed to his mother. Nicosia argues that his preoccupation, perhaps obsession, with a perfect marriage was imprinted by his mother as a part of total success in life: "His plan for the future [. . .] was to marry some 'fantastic' woman. She was an essential part of the dream of success, riches, and material splendor fostered by his mother" (150). Along with his naïve romantic notions of marriage, he also dreamed to have children with his right woman, children whom he wanted to be "important authors, wits, philosophers, reviewers, poets, and play-writes" (Amburn 68).

II. The Two Writers' Different Attitudes toward Social Identity

What, then, makes the literary works by Carver and Kerouac so different despite the similarities in their traditional sense of social identity? Let us view how their original attitudes toward social identity were shaped by their life circumstances. In spite of his high regard for the traditional male gender role and a happy marriage, Kerouac could never fully create an ideal family. He was married three times but neither played the role of breadwinner with a steady job nor had any parenting experience. He liked children "as long as they weren't his, and were no responsibility" (Amburn 330). He indeed denied his paternity and refused to pay the expense of bringing up his daughter when his second wife Joan took legal action, naming Jack as the father of her daughter, Janet (Amburn 167).²

One of the reasons why Kerouac failed to properly perform as the head of his family is that he was too naïve to face the realities of holding a family. As Nicosia maintains, "[h]is most pressing need was for a wife. [. . .] The problem was finding the right woman" (327), and Kerouac could not accept any flaws in his women. Since his notion of the perfect marriage was imprinted by his mother, he strived hard to find the wife-to-be who would successfully meet his and his mother's high standards. For Kerouac and his mother, his wife

should be a caretaker of him and his old mother.³ Kerouac could not, however, satisfy his demanding mother, who once called her son's girlfriend "a savage" (Amburn 301). Tired of the perpetual pursuit of "the right woman," Kerouac eventually abandoned his sense of duty as a responsible male and escaped into the self-indulgence of being sheltered under his mother's patronage, without having any steady jobs.⁴

Kerouac's escape from a traditional male gender role also relates to his ambivalence toward his masculine father and his own masculinity. Besides his bisexuality, which presumably caused him trouble in adapting himself into a uniform masculine role model, he also had a difficult relationship with his father, whose manhood he originally admired. Kerouac's father always hated Kerouac's hobo-bohemian lifestyle with his beatnik friends, and this made the virtue of traditional manhood somewhat colorless (Hipkiss 16). Kerouac also found meaninglessness in pursuing the traditional men's virtue, as shown by his father's failure in American society, where everything was "arranged for the exploitation of poor minorities like the Canucks, and this sense of injustice led to a rebelliousness against the standing order" (Nicosia 37). In this sense, Kerouac's father represented not only the traditional value of patriarchal manhood but also its disillusionment.

While Kerouac's excessive romanticism about marriage and family prevented him from establishing a firm social identity based on the conventional male model, Carver, in contrast, had no choice but to be a realist father and the head of his family. He married Maryanne and had his first child at the age of 19. It is true that he sometimes detested the burden of parenting and the menial jobs he had to undertake in order to hold his family together. He confesses in an essay, tired of endless household chores and a "feeling of helpless frustration that had [him] close to tears," he thought that:

nothing [. . .] that ever happened to me on this earth could come anywhere close, could possibly be as important to me, could make as much difference, as the fact that I had two children. And that I would always have them and always find myself in this position of unrelieved responsibility and permanent distraction. (Carver, *Fires* 33)

His feeling of helplessness and desperation, however, paradoxically shows his obsession with his position as the head of household and the traditional role of a father. He did not after all totally abandon his sense of responsibility, that is, his social identity as a family man.

As we have seen so far, Carver and Kerouac had much in common in terms of their sense of social responsibility. They shared similar ideals about being a father, a patriarch, and a head of household. There is, however, one large difference in terms of their social identity. Kerouac quit pursuing a perfect marriage and family and refused to grow up, as Beatness was a movement of perennial youth, by rejecting the adult world where even his masculine father failed to achieve an ideal identity. Carver, in contrast, desperately tried to act like a grown-up, mature-hearted father and take care of his children, without any education or proper skills for a steady job.

III. The Renegade Drivers in Carver's Poems

Now that we have a general perspective on the two writers' contrasting attitudes toward social identity

Homeward Bound

based on their different autobiographical backgrounds, let us study Carver's renegade drivers in comparison with Kerouac's characters. The moral standpoint of the narrator in Carver's poem entitled "Drinking While Driving" might be the closest to the Beathood of Kerouac's characters. The narrator, presumably suffering from alcoholism, drinks whiskey while driving: "I am happy / riding in a car with my brother / and drinking from a pint of Old Crow / We do not have any place in mind to go, / we are just driving" (53).⁵ Here, the narrator expresses his euphoria about having a pleasant sensation from driving and inebriation, which Kerouac's characters often share in *On the Road*.

The narrator also refers to his quiet desperation, however, as he implies a proclivity toward suicidal death: "If I closed my eyes for a minute / I would be lost, yet / I could gladly lie down and sleep forever / beside this road. [. . .] / Any minute now, something will happen" (53). The first two lines of this poem seem to show the narrator's desperation: "It's August and I have not / read a book in six months" (53). Considering the tendency for Carver's poems to be autobiographical, this poem reveals the sadness of a writer who is not able to read and, of course, write because of alcoholism, just as Carver was not.⁶ As if escaping from the fact that his social function is annulled, the narrator drives his car to nowhere in particular, drinking bourbon on the way. Even while expressing happiness of drunken driving, however, the narrator cannot help but remember his wretched social condition.

More importantly, "Highway 99E from Chico," another poem by Carver, also deals with a driver running away from society and reveals more of the narrator's (and Carver's) obsession with family than "Drinking While Driving." Judging from the fact that Carver actually lived in Chico in 1958 and his wife's name appears in the poem, "Highway 99E from Chico" is also based on Carver's real life as much as "Drinking While Driving."

Being away from home, the narrator of the poem spends a night in his car parked beside rice fields along Highway 99E. The narrator associates the view from his car windows—a view of ditches, rice fields, and the birds under the moon—with the tropical exoticism of Mexico and Honduras (117). The yearning for the sensual, exotic south is shared by the characters in *On the Road*, who ultimately set off for Mexico. As the narrator concludes this poem, "I tell you Maryann, / I am happy," he seems to be experiencing a sort of renegade euphoria from being away from home.

Underlying the narrator's act as a social outsider, however, is his attempt to maintain his bond with his family and home. In the first place, the narrator is not far away from his home in Chico. Compared with Kerouac's beatniks, who harbor the insatiable ambition of traveling across the continent, the narrator, content with the short trip, is a pseudo-renegade. What is more important here is the narrator's speaking to "Maryann," presumably the narrator's wife or lover. Just as the narrator in "Drinking While Driving" recalls reality in the middle of his beatnik bliss, the narrator in "Highway 99E from Chico," too, recalls the very woman he is running from. In other words, the narrator's joyful getaway from home and society is paradoxically dependent on his sense of rootedness because he cannot recognize his happiness without imagining the anxiety that his wife or lover is experiencing during his absence.

The identities of these two renegade travelers of Carver's are, despite their wish to flee from society, essentially subsumed by their homes and families. This is in part derived from their obsession with their

social identities, since, once being out of family or society, nothing can secure their existential *raison d'être*. For this very reason, the narrator of the first poem, even while enjoying drunken driving, refers to the reality that for a long time he has hardly read any books. In other words, by mentioning his present situation, he subconsciously tries to reconfirm his identity as a writer and his profession, which he should sooner or later return to. Similarly, the narrator of the latter poem speaks to his woman, in a monologue, as if identifying himself as being in a relationship to her.

However, in *On the Road*, Kerouac's beatnik characters pursue their "one and noble function of the time, [to] *move*" (Kerouac 133), which opposes settlement and domesticity, at the great sacrifice of their women at home. Robert A. Hipkiss points out that in most of Kerouac's works:

most of major women characters are long-suffering on behalf of their men. [. . .] Women are the caretakers of the earth; as such, a patient endurance is required of them, and a willingness to suffer. (23)

Kerouac's characters, including Dean, who at the end of the novel was "three times married, twice divorced, and living with his second wife" (Kerouac 305) with children, do not seem to seriously consider settling down in a solid, responsible household. Put side by side with these eccentric characters of Kerouac's, Carver's narrators' essential inclination toward domesticity and their social identity as family men clearly stands out.

IV. Carver's Obsession with Social Identity in "The Pheasant"

We have examined Carver's characters' inclination toward family and home and their social identities. Carver further explores his fear of losing a social identity in his story entitled "The Pheasant," which depicts a bohemian driver separated from society. This story is, as C. S. Schreiner insightfully points out, "Carver's muted elegy to Beathood" (61) and makes a clear contrast between Carver's moral standpoint toward social responsibility and Kerouac's.

The beginning of the story predicts the loss of identity of Gerald Weber: "Gerald Weber didn't have any words left in him. He kept quiet and drove the car" (166). The story illustrates the endangered relationship between Gerald, an apprentice actor, and his patron, Shirley Lennart, who ride together in Shirley's "big car" (166) to her summer home 300 miles away. Three years earlier, having been a penniless student actor at UCLA, Gerald started living with Shirley, who had connections in the film industry and could support him financially. Since then, he acted some minor roles and, otherwise, lived a gorgeous life in the affluence Shirley provides him with. By being Shirley's kept man, Gerald became a social outsider who is free from any responsibilities of the real world, from toil and financial trouble. As long as he remains in the prosperous life supported by Shirley's inexhaustible money, he can drink martinis as much as he likes, and can drive 300 miles to her summer house at midnight without bothering about his schedule the next day. Shirley's "big car" is, in this sense, a symbol of freedom and a spontaneous way of living that Gerald and Kerouac's offbeat characters commonly dream of.

As we have observed in "Highway 99E from Chico" and "Drinking While Driving," however, unlike beatniks such as Kerouac's Sal and Dean, who relentlessly pursue freedom, Carver's characters generally fear losing their social identities rather than enjoy disconnection from society. Gerald becomes astonished

as he realizes that the freedom given by Shirley made him callous enough to kill wildlife on purpose: while driving her car, he intentionally hits a pheasant on the highway (166). Considering the financial resources of Shirley, the damage to the car from the impact or the trouble of repairing it means practically nothing to him. In fact, Shirley does not pay any attention to the incident at all. What astonishes him the most is the extent to which he is separated from the real world. Recollecting that he accelerated when he sighted the pheasant, he reaches a shattering revelation: "he suddenly understood that he no longer had any values. No frame of reference, was the phrase that ran through his mind" (169). Having no "frame of reference" means to him that he is not codified in society. Put another way, he has no social identity with any socially responsible function. Gerald on the one hand appreciates the bohemian lifestyle without any responsibility; but, as Schreiner puts it, "on the other hand, he is disheartened by his inaction and lack of self-direction" (65). What really terrifies Gerald is that his unrestrained life under Shirley's patronage demolishes his "frame of reference" and his internalized social codes without his noticing it.

Gerald, in "The Pheasant," along with the narrators of "Highway 99E from Chico" and "Drinking While Driving," attempts to re-codify himself and to reconstruct his social identity. When he and Shirley drop by a restaurant for breakfast, he gives her back the key to her car and says farewell to her in order to start a new life:

He said, "I suppose I'll say goodbye then, Shirley. If that isn't too melodramatic." They stood there in front of the restaurant. "I'm going to try and get my life in order," he said. "For one thing, find a job, a real job [. . .] ." (170)

He is determined to strive for a new life by finding a "real job," rather than acting the minor roles that his patron has given him. Gerald's words reflect the traditional virtue of hard work, in which Carver himself believed. To get "life in order" is, therefore, for both Gerald and Carver, to construct a social identity and to have "a frame of reference" that is based on the American work ethic and, most likely, an orthodox sense of the male gender role.

Gerald cannot help but legitimize himself as a social existence according to cultural codes and a familial gender role. Nor can he plunge into the abyss of anarchic freedom totally separated from society as Kerouac's characters do and perhaps Kerouac himself did. In this sense, Gerald too is one of Carver's renegade drivers who are essentially homeward bound. While Gerald heroically awakens to his social maturity, Kerouac's renegades reject growing old, that is, accepting a social identity with responsibility in the adult world. Hipkiss maintains that Kerouac's works in general try "to keep one's emotional responses to life free and instinctive, always remaining in touch with the innocent primal vision of God's saving beneficence at the core of things" (13). In fact, even for Sal, who in the end sensibly separates himself from Dean's self-destructive Beathood, maturity is something he should avoid, as he sadly says in the last paragraph of the novel: "[N]obody knows what's going to happen to anybody besides the forlorn rags of growing old" (310). The distinctive difference between the moral standards about social identity of Carver's and Kerouac's characters strongly illustrates the contrast between the general tones of two writers' works.

Conclusion

Characters' conceptions of an ideal lifestyle clearly differ in Carver's and Kerouac's works. However, there is something the two writers have in common: they both struggled with the inconsistency between a stable domestic life and a spontaneous way of life on the road. They also shared a serious ambivalence toward responsible social identity. Kerouac started with an obsessive sense of men's duty as the head of household and later tried to reconcile it with his bohemian lifestyle, only to establish neither. He eventually retreated into the self-indulgence of an easy, childlike life with his mother and alcohol. Carver, starting with his ambition to have an adventurous excursion across continents, was forced to carry a burden of familial responsibilities and, as a result, experienced a divorce, two bankruptcies, and alcoholism, all of which are depicted in his stories and poems.

The lifestyles of their characters are very distinctive and their moral standards are ostensibly stable and coherent. However, knowing that both writers harbored an internal conflict about an ideal way of life, we discover another aspect of their works by assuming that the seemingly resolute characters of each writer are actually in search of an alternative life; Kerouac's bohemian characters wandering around looking for a stable family life; Carver's domestic characters aspiring for life on the road. This makes their tragedies even more tragic.

Notes

1. For a description of Carver's close relationship with his father and his sense of responsibility as the head of household, see Kurihara, "What Carver Writes about When He Writes about Fishing: Manhood in Raymond Carver's Fishing Stories," *Phoenix*, No 63 (June 2005), 21-40. Carver's father often took his sons fishing and Carver eventually grew up to love fishing for the rest of his life. In his fishing fiction and poetry, fishing is a symbol of men's duty as the breadwinner and is always at the center of Carver's concept of traditional manhood and conventional patriarchy.
2. Officially, Kerouac denied his paternity because he witnessed Joan's infidelity. He once confessed to Allen Ginsberg in a letter, however, that he had been surprised to see how Janet had resembled him (Nicosia 471). Afterwards he reluctantly agreed to pay the expense of bringing up Janet.
3. For example, Turner maintains that Kerouac's second marriage to Joan "was probably an insurance policy for his lonely mother – he felt that Joan was just the sort of girl to look after her in her old age" (117).
4. Although Kerouac's third wife, Stella, undertook the role as a caretaker of the Kerouacs, their marital relationship was not something that motivated Kerouac once again to pursue his ideal self as a breadwinner. Rather, his turning to Stella, who embodies the good old days in his hometown Lowell, was nothing more than a mental retreat into his childhood memories (Maher 257).
5. All quotations from Carver's poems and stories are taken from *Fires: Essays, Poems, Stories*.
6. In an interview, Carver referred to the autobiographical element in his poetry, and said, "I suppose the

poetry can be much more personal than the fiction” (Bonetti 59).

Works Cited

- Amburn, Ellis. *Subterranean Kerouac: The Hidden Life of Jack Kerouac*. New York: St. Martin's Griffin, 1998.
- Bonetti, Kay. "Ray Carver: Keeping It Short." Gentry and Stull 53-61.
- Carver, Marianne Burk. *What It Used to Be Like: A Portrait of My Marriage to Raymond Carver*. New York: St. Martin's, 2006.
- Carver, Raymond. *Carver Country: The World of Raymond Carver*. With photographs by Bob Adelman. New York: Scribner, 1990.
- . *Fires: Essays, Poems, Stories*. 1983. New York: Vintage, 1989.
- Gallagher, Tess. "Carver Country." *Carver Country*. By Raymond Carver 8-19.
- Gentry, Marshall Bruce and William L. Stull. *Conversations with Raymond Carver*. Mississippi: Mississippi UP, 1990.
- Halpert, Sam. *Raymond Carver: An Oral Biography*. Iowa: U of Iowa P, 1995.
- Hipkiss, Robert A. *Jack Kerouac: Prophet of the New Romanticism*. Lawrence: The Regents P of Kansas, 1976.
- Kerouac, Jack. *On the Road*. 1957. New York: Penguin, 1976.
- Maher Jr., Paul. *Kerouac: The Definitive Biography*. Lanham: Rowman & Littlefield P, 2004.
- Manning, Toby. "Driving Along in My Automobile." *New Statesman & Society* 14 Apr. 1995: 33-34.
- Nicosia, Gerald. *Memory Babe: A Critical Biography of Jack Kerouac*. Berkeley: U of California P, 1983.
- Turner, Steve. *Angelheaded Hipster: A Life of Jack Kerouac*. New York: Viking, 1996.
- Weber, Bruce. "Raymond Carver: A Chronicler of Blue-Collar Despair." Gentry and Stull 84-97.
- Schreiner, C. S. "Roadkill and the Birth of Thought." 『文藝と思想』. 福岡女子大学文学部紀要. 第64号 (2000年2月): 61-75.

『天と地』にみる「帰化不能外国人」としてのLe Ly Hayslip

長井志保

はしがき

本研究の対象作品名『天と地』は、作者Le Ly Hayslipの自伝*When Heaven and Earth Changed Places: A Vietnamese Woman's Journey from War to Peace* (1989) と続編*Child of War, Woman of Peace* (1993) の2編を、邦訳と映画化のタイトルに合わせて一つのタイトルにまとめたものである。現在、作者レ・リ・ヘイスリップは、2人目の夫であったヘイスリップの姓を名乗っているが、ここでは以下「レ・リ」という名前での表記にとどめる。作者はベトナム中部で生まれた農村出身のベトナム人女性で、アメリカ人の夫に伴って1970年にアメリカに移住している。当時、農民はベトコン、南ベトナム政府軍、そしてアメリカ軍の三者から協力を強要された。その上、ベトコンの根拠地である農村を壊滅させるというアメリカ軍の戦略のために、農民は村を追われ、都市地域に住むことを余儀なくされた。これら離散農民の多くが様々な下働き、売春、ヤミ商売、麻薬販売に従事せざるをえなかった。村を追われた農民は、現在でも都会において最貧民層をなしており、ベトナム戦争の傷跡はいまだに消えていない (cf. Phan 28)。本論では、主人公レ・リのアメリカ社会における同化の状況を『天と地』を素材にして検討する。さらに、人種差別とベトナム戦争が同化におよぼした影響を、第二次世界大戦における日系アメリカ人の場合と比較して検討する。

1946年から8年間続いた抗仏戦争後、ベトナムは南（ベトナム共和国）と北（ベトナム民主共和国）に分断される。アメリカの支援を受けたカトリック信者であるゴジンジェム政権の時、カトリック教徒対仏教徒の宗教理念をめぐる反目、都市生活者（富者）対農民（貧者）の対立、土地をめぐる土着ベトナム人对移住者（中国人、クメール人）の数世紀以来の反目等の混乱した状況下、南ベトナム解放民族戦線（ベトコン）が掲げるスローガン「民族統一」のために内戦状態となる。この内戦はアメリカ軍、オーストラリア軍、韓国軍等を巻き込み、1975年のサイゴン陥落まで10年間（1965-1975）に亘ってベトナム全域を戦場と化した。その後、アメリカへのベトナム人難民は、1975年に13万人、1990年までに60万人となり、2000年には、アメリカのベトナム人人口は100万人を越えた (Masequesmay 134, note 11)。

I. ベトナム系アメリカ文学

ベトナム系アメリカ文学には、ベトナム戦争の回想録が多くある。その作者のほとんどは、かつてベトナムでは上流階級で、高い教育を受けた都市居住者であった。農民がアメリカに移住で

きるケースは極めてまれであったし、また、約200万とも400万ともいわれるベトナム戦争犠牲者の大部分が農民であった (Phan 27)。『天と地』は農村出身の作者によって書かれており、その意味でこの作品は、ベトナム系アメリカ文学において非常にユニークな存在である。

ベトナム戦争はあまりにも大きな出来事であったので、アメリカのベトナム人1世は創作のテーマとして戦争を回避しえないのである (Phan and Ha 71)。『天と地』もまさしくこの範疇に入る。しかし、次に示すように、現在のアメリカにおける1.5世代と2世の文学は、戦争というテーマからの離脱を試みている。

... growing up in the U.S., they [1.5 and second-generation Vietnamese American writers] were confronted with hegemonic discourses that reduced them and their ancestral country into "Orientalist" tropes of war. This has prompted many writers in this generation to challenge these insidious tropes that take away from their humanity. (Phan and Ha 68)

そして、今後の1.5世代と2世の使命は、ベトナム系アメリカ文学において、フランスやアメリカから受けた文化的影響を再構築し、いかに彼ら／彼女らのベトナム人像を描くかということである (Phan and Ha 67)。

十分な学校教育を受けていないレ・リにとって、英語はおろか母国語のベトナム語であっても、著述は困難であったと思われる。そのため、自伝の構成、表現等においてリライト（翻訳者／共著者）に依存するところが大きいといえるであろう。Monique T. D. Tru'ongによると、ベトナム系アメリカ文学は、アメリカ人リライトによって編集がなされており、書き直されたものには、リライトの意識的な操作による、作者の創作権侵害の可能性がある (219-44)。また、Traise Yamamotoは、そもそも自伝とは作者が過去を再構築するフィクションであり、それは「一種の偽装」(114)である、そして作者は、必ず読者を意識して自伝を書くものである (106) と言う。リライトによる編集が施された自伝である『天と地』を読む場合も、このような理解は不可欠のように思える。

II. 『天と地』の構成と背景

主人公レ・リは、南北ベトナムを分ける北緯17度線の軍事境界線に近いキラ村で、農家の末っ子として生まれた。戦争が始まると、長男は北ベトナム軍に、次男は南ベトナム軍に徴兵された。この次男は、地雷に触れて死亡する。長女の夫はフランス軍に連行されて生死不明、次女の夫も北ベトナムに行き帰らず、三女は都会に奉公に出される。四女のレ・リは14歳の時、ベトナムに裏切り者として死刑を宣告され、陵辱されるが、かろうじて生き延びる。そして、レ・リ同様ベトナムに処刑されそうになった母とともに、故郷を捨ててサイゴンに逃れる。そのことをベトナムに追求された父は自殺する。このように、戦争はレ・リ一家を崩壊させてしまう。サイゴンで奉公人として働くうちに、未婚の母となったレ・リは、このことを一族の恥であるとの自責の念に駆られる。レ・リは愛情の無い計画的、かつ打算的な結婚によってアメリカへ移住するが、結局2度に亘る白人アメリカ人との結婚に失敗する。

題名*When Heaven and Earth Changed Places*は、レ・リが生き抜いたベトナム戦争があたかも天と地が入れ代わったようであった、という認識からきている (247, 358)。作者はこの自伝を通

して、戦争下における農民の苦しみと、アメリカ兵やその親類たちが負った傷は、同様のものではないかと訴えた。この自伝はレ・リが自己の魂を救うために、故郷の村に病院を建設する運動を起したところで終わる。そして、アメリカ人もその慈善事業に参加し、ベトナム人を救済することによって救われようではないか、と提唱する。

Ⅲ. 同化の考察基準

レ・リはアメリカに移住後、さまざまな問題に直面する。そして、アメリカ社会に溶け込むことができないという同化の問題が起こる。レ・リのように異なる民族、言語、生活習慣をもつ国へ移住する際には、新たな環境への同化が、移住者とその受け入れ国にとって非常に重要となる。『天と地』におけるレ・リの同化問題を検討するために、同化状況を見る考察基準として、社会学で一般的に使用される次の4項目を採用した (cf. Waters and Jiménez 105)。(1) 社会・経済的な立場、(2) 語学の技能レベル、(3) 密集度・住居パターン、(4) 異なる人種・宗教・階級間の結婚。しかし、同化には上記の移住者本人に関する事項の他、移住者を取り巻く環境が、同化を促進するか否かも非常に重要な要素になると考えられる。ここでは、レ・リが環境から受けた影響を検討するために、さらに次の2項目を追加する。(5) 人種差別、(6) 戦争が及ぼす影響。以上の6点により、レ・リの同化を検討したい。

(1) 社会・経済的な立場

移住国での生活にどの程度適応できるかは、出身国で受けた教育レベルの高さに対応するといわれる (Phan 29-30)。ベトナムでレ・リは、3年間の学校教育しか受けていない。また、村で使う語彙は、宗教的な祈りの言葉、噂話や日常生活に必要な言葉に限られており、それ以外のことについてはベトナム語によってでさえも、まともな議論はできない (Child 193)。アメリカ移住後、レ・リはコミュニティ・カレッジで、移民のための英語教室に短期間通い、その後、経営学の学習やアメリカ市民権を取得するための実践的な勉学に励む (Child 194) が、これらの学習が大学レベルであるとは考えにくい。それゆえ、レ・リがプロフェッショナルあるいはホワイトカラーの職業に就くことは不可能に近い。事実アメリカで、レ・リは収入が決して高いとは言えない、メイドや工場の組み立てライン工の仕事に従事していた。そこで共に働いていたのは、メキシコ人及びその他のヒスパニック系、黒人、フィリピン人、ラオス人、ベトナム人であり、黒人を除けば、全てがレ・リと同様に移民であった。後にレ・リは、東洋料理レストランの共同経営者となる (Child 214)。これは、語学力や資格が欠如する移民の職業や経済活動の典型である。しかも、レストラン経営のような商売は、収入が極めて不安定である。

(2) 語学の技能レベル

アメリカ移住以前、レ・リはベトナムでアメリカ兵を相手に闇商売、水商売、売春 (1度) 等をしており、この種の職業に特有の会話主体の英語スキルは身につけていた。しかし、読み書きは、職業斡旋所で英語の申請書を自力で記入できなかったほど不十分であった (When 308)。20歳でアメリカに移住した後も正規の教育を受けていないために、英語力不足のレ・リは、ビス

ケットを作る材料の箱に書いてある指示文が理解できない (*Child* 39)。英語でバイブルを読めないレ・リに本が書けるわけがない、とアメリカ人の夫に悪態をつかれる (*Child* 163)。以上のようなレ・リの語学力不足から生じるコミュニケーションの問題により、夫の親類達とも十分に意思疎通が図れない。そのため、アメリカ文化や生活様式を理解することができず、レ・リは孤独感を深める (*Child* 54)。

(3) 密集度・住居パターン

同じ民族同士で密集して居住せず、分散して住むことができるか否かは、同化の点から重要なことである。事実、アメリカ政府は、移民をカリフォルニアやテキサスなど複数の地域に分散して受け入れる政策を取った (*Chan* 157)。しかし、実際には、中国人はチャイナ・タウンに、ベトナム人はリトル・サイゴンに、同民族同士が集まって居住する傾向にあることは周知の事実だ。Hung C. Thaiは、この集団を形成する習性を次のように説明する。

Rooted in a belief system emphasizing family obligation and patchworking of resources, the Vietnamese often reject the values of self-sufficiency, individualism, and egalitarianism that are generally prevalent in mainstream U.S. culture. For the Vietnamese, the ideology of family collectivism is also practiced in the realm of friendship and as such, friends are often spoken of as family. (56)

レ・リの場合、アメリカ移住当初は夫の親戚と同居するが、彼らに疎外されていると感じて孤独感に苛まれる。2番目の夫と暮らし始めて、ベトナム寺院に通うようになると、ベトナム人との交流の輪が広がる。そして、ベトナム人孤児たちの里親になると、家の中にはベトナム語が飛び交い、ベトナム料理の匂いが立ちこめる。白人居住区に住むレ・リにとって、ベトナム人孤児たちは彼女の魂の救済となる。レ・リは、このことを「身寄りの無い子供たちが私を必要とするのと同じくらいに、私も彼らを必要としていた」(*Child* 151)と表現している。リトル・サイゴンに住むベトナム人と同様に、白人居住区に白人の夫と住むレ・リも、同じ民族同士で集団を作る習性から離れることができなかったのである。

(4) 異なる人種・宗教・階級間の結婚

レ・リはアメリカに移住するために、「衛生班のレッドを、次には民間技術者のジムを、その次には空軍将校のポールをなんとか自分に夢中にさせようと必死になる」(*Child* 43)。レ・リにとって結婚は、アメリカに渡るための打算的なものでしかなかった。アメリカ人との結婚について、母から「外国人との結婚が家名を汚す」と、姉からは「アメリカ人との混血は、侵略者の汚れた血を受け継ぐことだ」と言われ (*When* 348)、肉親を含めたベトナム人から蔑まれ、露骨な嫌がらせを受ける。アメリカ人の夫の親類からは、金とアメリカでの生活がレ・リの目当てであると言われる。これに対してレ・リは、アメリカに行くためにエドの弱みにつけ込んだと自ら認めている (*Child* 91)。エドとは、ベトナム戦争中にサイゴンに滞在していたアメリカ人技術者で、レ・リの最初の夫である。レ・リの結婚は、肉親はもとより、その他の周りの人々からも祝福されないものであった。これに対してレ・リは、アメリカ人と結婚してアメリカに行くことを、父が彼女に言った「生き延びよ」(*When* 32)という言葉に従って、「生き延びるため」(*Child* 26)

であると自らを説得する。しかし、「生き延びるため」という生への切迫した語感は、「リッチ」なアメリカ人とつき合い、アメリカ人の妻として安楽な生活を送りたいというレ・リの現実とは違和感がある。戦争下でのベトナム人の常識を逸脱したアメリカ人との結婚を、レ・リは「父に従う」というベトナムの模範的な道德行為にすり替えて自己弁護していると考えられる。

頑迷なクリスチャンである2番目の夫デニスと、仏教を信仰するレ・リは、お互いの宗教を理解できない。また、レ・リの手料理を「醤油と生姜」(Child 144)の味がして、具合が悪くなると言うデニスを、自分の宗教と食文化を否定しているとレ・リは受けとめる。レ・リにはデニスの反応の背景にある文化的の差異を探る姿勢が見受けられず、一方的に白人デニスを非とする二元論的な思考が内在する。こうして相互理解は拒絶され、白人男性との2度の結婚は失敗に終わる。

(5) 人種差別

ベトナムは中国に紀元前2世紀から10世紀まで千年以上も支配され、1883年にフランスの植民地となり、1946年の抗仏戦争からベトナム戦争が終わるまで30年間に亘って戦争が続いた。外国による支配とそれに対する抵抗の繰り返しによって、ベトナム人は強い「ゼノフォビア(外国人ざらい)」(開高 287)になったといわれる。このことは、ベトナム人が、アメリカ人男性と結婚したレ・リを差別的に扱ったことからもうかがえる。

一方、以下の文脈からレ・リ自身の人種的偏向を見ることができる。フランス軍の兵士として抗仏戦争でベトミンと戦ったモロッコ兵と、ベトナム戦争における韓国兵に対して“... some Korean soldiers went to a school, snatched up some boys, threw them into a well, and tossed a grenade in afterward as an example to the others. To the villagers, these Koreans were like the Moroccans_tougher and meaner than the white soldiers they supported.”(When 198)と残忍な有色人種のイメージを強調し、かつ、彼らが白人よりも卑劣であったと語る。これに対して、アメリカ兵に関しては次のように記述する。

... a GI truck stopped briefly and threw out some garbage ... When we opened the largest box, however, everyone stepped back in horror. Inside was a young woman, naked and mutilated_but not from war. From the look of her (makeup streaked by her final tears, tight mini-skirt pulled up around her waist, etc.) she was a hooker who had been “trashed”_used, abused, and dumped_by the servicemen. (When 226)

しかし、アメリカ兵の残虐な行為を目撃しても、レ・リはアメリカ兵について“... I never really hated American soldiers. We resented them for invading our country, of course, but we didn't take it personally.”(Child 23)と言い、そこにはモロッコ兵、韓国兵に発せられたような糾弾の言葉はない。この部分は、前述のTraise Yamamotoが言うように『天と地』の作者としてアメリカ人読者を意識し、読者におもねているものとも考えられる。さらにMonique T. D. Tru'ongが言及するように、作者の意図から離れて、アメリカ人ライターによって意識的にアメリカに好意的になるように文章が書き換えられた可能性もある。

『天と地』は作者が長男のJames Hayslipに口述筆記させたり、あるいは作者がベトナム語と英語の辞書を片手に仕上げた原稿を、*When Heaven and Earth Changed Places*ではアメリカ人Jay Wurtsが、そして*Child of War, Woman of Peace*ではJames Hayslipがリライトしたものである。James

Hayslipは作者とベトナム人男性との間に生まれ、6歳まで戦下のベトナムで祖母たちに囲まれて幼少期を過ごした人物である。ここでこの2人にリライトされたものを語彙、文章表現の観点から比較検討してみる。Jay Wurtsのリライトでは、アメリカ人はベトナム人によって“resented, feared, and misunderstood”とされているが、それは“not your [American’s] fault”だと記述されている(xiv)。また、アメリカに居住できることは“honored”で、アメリカ市民であることを“proud”と思い、さらに息子たちを教育してくれたアメリカに対して“I do my best to honor the American flag”と表現するばかりで(365)、アメリカを非難するようなところはほとんど見当たらない。同じアメリカが、James Hayslipのリライトでは“a world without ancestors_without cause and effect_”(3)と表現され、“once hated adversary”(244)と断じられる。さらにアメリカ人の精神は“broken”(35)であると言い、アメリカ人男性を“narrow-minded, petty”あるいは“no conscience”と非難し、そしてアメリカ人男性は“nothing but dogs themselves”であると言い捨てる(174)。Jay Wurtsのリライトでは、アメリカを非難するような部分であっても全般的に控えめな語彙と表現を使っているのに対し、James Hayslipのリライトでは露骨かつ直裁的に表現している。この違いがリライターの性格からくる文章表現の違いなのか、あるいはリライターの意識的(無意識的)な文章の操作なのか、それとも原稿に記された作者の表現の違いによるものかはここでは判断できない。

アメリカ人から受けた人種差別としてレ・リは、“... the male clerk, seeing my *ao dai*, gave me a nasty stare. It was an expression I had seen before_mostly from Vietnamese in Danang who disapproved of my American boyfriends_but here it was something more.”(Child 23)と表現するが、ここはアメリカであり自分の国ではないのだと黙って目を伏せた(Child 23)。しかし、同時にベトナム人としての怒りがこみあげてくる。ベトナム人から受けた差別(When 353)、レ・リ自身の白人志向と有色人種への批難(When 198)、白人女性への劣等感(Child 27)、アメリカ人と結婚したことによる他のベトナム人女性への優越感(Child 64)、さらにアメリカ人から受けた人種差別(Child 23)が、レ・リの心には複雑に入り混じっている。

(6) 戦争が及ぼす影響

ベトナム戦争時にはレ・リの村も戦場となり、多くの村人がベトコン、南ベトナム兵、アメリカ兵によってレ・リの前で殺され、かつ拷問にかけられた。レ・リ自身も凌辱を受け、拷問にかけられ、死刑を宣告されながら生き延びてきた。この戦争体験によりレ・リは、「精神的外傷」(Child 24)を患う。レ・リは戦争について、“War guilt, I had learned, was partly the chagrin you feel for outliving a crisis that once consumed you”(Child 24)と述べており、戦争に翻弄されて傷つき、なお生きてゆくことを辛いことだと受けとめている。

Duane Phan & Nina Hahは、アメリカ人のベトナム戦争下におけるベトナム人観を“American stereotypes usually represent the Vietnamese as poor, uneducated peasants who are victims of war; another is of Vietnamese as the enemy, “gooks” who kill American soldiers.”(70)と言う。事実、アメリカ人が全てのベトナム人を東洋人、即ちアメリカの敵とみなす報道が多くなされていることにレ・リは憤りを覚える。テレビのニュース番組で、ジャーナリストの「作戦は成功したと思いますか」という問いに、若いアメリカ兵は、“Yeah, we burned down a lot of Charlie’s homes and destroyed the village_really killed a lot of gooks!”(Child 25)と満面の笑みで答えた。アメリカでレ・リはベトナム

ム戦争のテレビ報道を見て、「多くの村人が二十歳そこらで青春時代を送る間もなく死んでいった」と涙を流すが、アメリカ人の夫の家族から「わけもなく泣いた」と非難される（Child 26）。

ベトナム国内で同民族同士が戦う内戦に、アメリカが介入したベトナム戦争を、Monique T. D. Tru'ongは“*For Vietnamese Americans, this question of loyalties and, more specifically, sides has been a recurring and life-threatening issue since the arrival of U.S. forces in South Vietnam.*”（226-27）と説明する。ベトナム系アメリカ人にとって、アメリカによってもたらされる死は身近なものだった。この内戦においてベトナム人、特に農民たちは、昼は南ベトナム政府／アメリカ側に、夜はベトコンに支配され、両サイドから協力を強要され、逆らう者は容赦なく殺された。

この点について、日系人の場合と比較検討してみよう。志願して出征した2世たちを除き、一般的に日系人は戦争を直接的には経験していないし、日系人が第二次世界大戦から受けた苦悩はベトナム人のものとは異なる。日系人の苦悩はアメリカのよき構成員として貢献してきたにもかかわらず、制度化されたアメリカ政府の人種差別により強制収容所に入れられ、自由と市民としての権利さえも奪われたことであった。

人種差別と戦争が移民に与えた影響を日系2世Jimmy Tsutomu Mirikitaniの例にみることができる。彼は3年半の強制収容所での生活と、市民権「剥奪」というアメリカ政府の扱いに憤りを覚えた結果、80歳を過ぎててもアメリカの社会保障を拒否し続け、“crap government”あるいは“poor America”の世話にはならないと言う（Hattendorf）。そこには、人種差別と戦争が移民の心に与えた傷跡をみることができる。レ・リの場合は戦争によって精神的な外傷を受け、生き残ったことを悔やむという一面もあり、その後の生活に支障をきたす原因にもなるが、その憤りをベトコンや南ベトナム政府あるいはアメリカに向けることなく、戦争の悲劇を強く訴えるのである。白人アメリカ人志向を持つレ・リは、彼女が直面したアメリカ人の東洋人観と人種差別によって、アメリカ社会から疎外された心境にさせられたとも考えられる。そして、戦争と人種差別は、日系人Mirikitaniを日本人のアイデンティティに固執させたように、レ・リをベトナム人のアイデンティティに固執させる方向に作用するという可能性はある。

むすび

20世紀初頭にヨーロッパ大陸から新たに大量の移民がアメリカに流入した。第一次世界大戦を契機にアメリカは、特にドイツ系移民の同化に疑問を抱くようになり、「『100パーセント』のアメリカ人でなければ合衆国の模範的市民であり得ない」（油井・遠藤 31）という心理が国民の心を支配した。この点に関して、遠藤泰生は、100%の同化主義を否定するHorace M. Kallenの論旨を次のように紹介する。Kallenは、人間の属性は血統に根差す民族的特性と、市民権や職業などの社会的なものとの2つの部分から成り立っていると考え、先天的に備わった部分は環境に溶け込むことが不可能であるので、これは私的領域で保持しつつ、公的領域で市民として共生を図ることができればよいと主張した（油井・遠藤 30）。しかし、Kallenにはヨーロッパ系移民しか念頭になく、この説を発表した1915年当時は、アジア系移民の1世は「帰化不能外国人 “aliens ineligible to citizenship”」（Okiihiro 167）として市民権獲得自体を否定されていたのである。

一方、ベトナム戦争後にアメリカで生きる自己を、レ・リは次のように語る。

All my actions_done in good American fashion_ seemed to betray everything my father had taught me. My only hope was that by doing things “the American way” while keeping the Vietnamese way in my heart, I would somehow wind up doing what was right. (*Child* 170)

これは、まさにHorace M. Kallenが主張したように、少なくとも表面上は市民として共生しつつ、民族的特性は維持するという生き方である。アジア系に米国帰化の道を閉ざしていた人種上の障壁は、1952年に撤廃されていたのである (Niiya 206)。アイデンティティの問題について、Traise Yamamotoは日系2世作家Monica Soneの自伝*Nisei Daughter*を次のように紹介する。

What before the war had been an awareness of participating in two cultures became during and after the war a split self. “I felt,” writes Monica Sone, “like a despised, pathetic two-headed freak, a Japanese and an American.” (113-14)

『天と地』においては、人種上のアイデンティティ形成についてレ・リがSoneのように悩んだとの記述を見ることはできない。ベトナム人としてのアイデンティティに固執し、本質的にはアメリカへの同化を否定するレ・リには、アイデンティティに関する分裂した意識は見られない。レ・リは当初、アメリカの文化、文明を驚きと疑問の目で見る。しかし、レ・リはベトナムの文化、文明とアメリカのそれらとを比較するにあたって、アメリカの文化、文明に批判的であり、上記のSoneのように自己を分裂したアイデンティティをもつ “two-headed freak” とは考えない。そこには長期に亘る侵略者との戦争の中で、ベトナム人の心に植えつけられた考え、つまり、我々は正義（善）であり、相手は敵（悪）というベトナム人特有の「善悪二元論」（国際交流基金 115）的思考があり、彼我の違いを柔軟な思考で受け止める態度は全く見られない。

本論における考察の結果、レ・リがアメリカへ同化していないことは明らかであり、もし帰化が可能であることの条件が移住国へ同化できることであれば、レ・リは「帰化不能外国人」と結論できよう。

※本論は中・四国アメリカ文学会平成20年度秋季研究会（安田女子大学、2008年9月13日）において口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

Works Cited

- Chan, Sucheng. *Asian Americans: An Interpretive History*. Boston: Twayne, 1991.
- Hattendorf, Linda, dir. *The Cats of Mirikitani*. Pandora, 2006.
- Hayslip, Le Ly, with Jay Wurts. *When Heaven and Earth Changed Places: A Vietnamese Woman's Journey from War to Peace*. New York: Doubleday, 1989.
- , with James Hayslip. *Child of War, Woman of Peace*. New York: Doubleday, 1993.
- Masequesmay, Gina. “Emergence of Queer Vietnamese America.” *Amerasia Journal* 29 (2003): 116-35.
- Niiya, Brian (ed.). *Encyclopedia of Japanese American History: A-to-Z Reference from 1868 to the Present, Updated Edition*. New York: Checkmark Books, 2001.
- Okiihiro, Gary Y. *Margins and Mainstreams: Asians in American History and Culture*. Seattle: U of Washington P, 1994.

- Phan, Duane. "Diasporic Vietnamese Memoirs and 'the Vietnam Experience'." *ALA* 9 (2003): 26-31.
- Phan, Duane, and Nina Ha. "Against the Vietnam War: Contemporary Diasporic Vietnamese Writers RE-Presenting Themselves." *ALA* 7 (2001): 59-72.
- Thai, Hung C. "'Splitting Things in Half is so White!': Conceptions of Family Life and Friendship and the Formation of Ethnic Identity among Second Generation Vietnamese Americans." *Amerasia Journal* 25.1 (1999): 53-88.
- Tru'o'ng, Monique T.D. "Vietnamese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Ed. King-kok Cheung. New York: Cambridge UP, 1997. 219-46.
- Yamamoto, Traise. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*. Berkley: U of California P, 1999.
- Waters, Mary C, and Tomás R Jiménez. "Assessing Immigrant Assimilation: New Empirical and Theoretical Challenges." *Annual Review of Sociology* 31 (2005): 105-25.
- 開高 健『ベトナム戦記』朝日文庫、1991年。
- 国際交流基金アジアセンター アジア理解講座『ベトナム文学を味わう』 国際交流基金アジアセンター、1995年。
- レ・リ・ヘイスリップ『天と地・ベトナム編』渡辺昭子訳 角川文庫、1993年。
- ―. ジェイムズ・ヘイスリップ『天と地・アメリカ編』飛田野裕子訳 角川文庫、1993年。
- 油井 大三郎、遠藤 泰生（編集）『多文化主義のアメリカー揺らぐナショナル・アイデンティティ』東京大学出版会、1999年。

Assimilation and a Vietnamese American Woman in Le Ly Hayslip's *Heaven and Earth*

NAGAI Shiho

The autobiography of Le Ly Hayslip consists of two parts : *When Heaven and Earth Changed Places: A Vietnamese Woman's Journey from War to Peace* (1989), and its sequel *Child of War, Woman of Peace* (1993). In this essay the shortened title, *Heaven and Earth*, will be used, as it was used in the movie and the Japanese translation. This essay discusses the assimilation of a Vietnamese woman who emigrated from Vietnam in the turmoil of war to America after marrying an American. This essay also analyses the influence of war upon assimilation, comparing the cases of Vietnamese Americans in the Vietnam War and Japanese Americans in World War II.

Among many Vietnam War memoirs, *Heaven and Earth*, authored by Le Ly Hayslip from a poor farming family, is unique because most war memoirs are written by people of affluent classes with urban backgrounds. With respect to Vietnamese American literature, Tru'ong argues in his paper that texts are manipulated and transformed by American rewriters (translators/coauthors). Yamamoto wrote that the textual self created through the processes of selection and reconstruction of the past are necessary components of autobiographies. It is important to bear these points in mind when studying autobiographies.

Le Ly, the main character of the text, was confronted with many difficulties assimilating into American society. Assimilation is considered to be important for immigrants themselves as well as for the host countries. It is particularly so if the immigrants are from countries of dissimilar cultures, languages, races and so on. The following four primary benchmarks (Waters and Jiménez 105) are adopted to measure Le Ly's assimilation level: 1.socioeconomic status; 2.language assimilation; 3.spatial concentration; and 4.intermarriage. However, not only the benchmarks listed above, which concern the characteristics of immigrants themselves, but also the cooperative surroundings for assimilation around immigrants are important. Therefore, this paper also examines the assimilation from the following points of view: 5.racial discrimination; and 6.influence of war.

The results of this analysis show that the level of Le Ly's assimilation is low, which indicates difficulties of assimilation regarding the four primary benchmarks. Moreover, her assimilation is adversely affected by the above reference points 5 and 6. Assuming that 'the eligibility for the citizenship' is defined as fulfilling the four primary benchmarks and blending into American culture, apart from the immigrants' original cultures, it can be concluded that Le Ly is an 'alien ineligible for citizenship'.

中・四国アメリカ文学会第37回大会シンポジウム 「Hawthorne と19世紀アメリカ社会」

まえがき

中山慶治

2004年7月4日はNathaniel Hawthorne生誕200年に当たり、日本ナサニエル・ホーソーン協会では、これを記念して記念論文集『ホーソーンの軌跡』を編んだ。内容は作品論というよりもむしろ伝記的なもので、専門家ならずとも知的好奇心を十分に満足させられるものであった。本論文集第1章「ホーソーンの前祖をめぐって」の最終ページで編著者の川窪啓資氏は、同年7月にセイラムで開かれた生誕200年を記念するアメリカ・ホーソーン協会の学会に、アメリカ以外では最多の12人の日本人研究者が参加したことを特筆している。(16) わが国における「ホーソーン熱」が冷める気配は一向にない。

ところで、今回のシンポジウムの世話役を引き受けた際に先ず念頭にあったのは、中・四国アメリカ文学会の会員で現在研究の軸足を他の分野に移しておられる方々の中にも、かつてホーソーンを読んでおられた方が存在するというのであった。そこで、今回は発題者を中・四国アメリカ文学会のメンバーに限定し、あまり縛りの強くないテーマでお話いただこうと考えた。

テーマを設定するに当たっては、社会改革運動など、19世紀中葉のHawthorneとほぼ同時代の問題に限定することも考えてはみたが、発題者のタイトルとうまくかみ合わない部分もあり、結局、「Hawthorneと19世紀アメリカ社会」と、やや漠然としたテーマに落ち着いた。無論、19世紀という時間軸は絶対的なものではなく、過去そして20世紀、21世紀へと自由に越境することも可とした。

今回、世話人は司会役に徹することとなったため、各発題について簡単なコメントと解説を加えることでその役目を締めくくりたい。

城戸光世氏の「19世紀版「丘の上の町」—ホーソーンとシェーカー—」は、ご自身のシェーカー共同体でのフィールドワークをもとに、“The Canterbury Pilgrims”と“The Shaker Bridal”の二つの短編を取り上げ、Hawthorneのユートピア共同体との関わりや彼のユートピア観を検証するもので、きわめて刺激的な内容であった。氏の発題の主眼は、Hawthorneのスタンスが一貫してユートピア運動に対してネガティブであったのではなく、実際に共同体を訪ね、またその中身を冷静に吟味した結果から導き出されたものであることを明らかにし、Hawthorneにとって真に理想的な共同体とは何であったのかを提示することであった。

藤吉清次郎氏の「*The Scarlet Letter*と*Beloved*—「スレイヴ・ナラティヴ」の観点から—」は、ノー

ベル賞を受賞した現代の黒人女流作家Toni Morrisonの代表作品*Beloved*を取り上げ、スレイヴ・ナラティブの観点から、読者をして*The Scarlet Letter*のポストモダンな読みへと誘導しようという野心的な試みであった。Hawthorneが奴隷制度に対してProvidenceに任せるべきだという、ややあいまいな態度をとっていたことは周知の事実だが、藤吉氏はヘスターとパールの関係の中にHawthorneの「編集された」スレイヴ・ナラティブを読み込むことにより、*Beloved*が*The Scarlet Letter*への批判の書であることを論証しようとした。そして、Morrisonの投げかける重々しいメッセージ、すなわち白人作家Hawthorneの描く黒人表象には限界のあることを、Leland Person等の意見を援用しながら明らかにした。ただし、かなりラディカルな内容であるだけに、フロアからの質問が殺到したことは言うまでもない。

上田みどり氏の「イーディス・ウォートンとホーソーン作品に表れる女性の描き方」は、すでに研究の領域をHawthorneからEdith Whartonに移している上田氏に、HawthorneとWhartonを関連づけて話してほしいという、司会者の無理な要請に応えるものであった。幸い、WhartonはHenry Jamesを介してHawthorneと繋がっていた。上田氏はWhartonの作品の底に流れるHawthorne的なものとJames的なものに着目し、「ニューイングランド精神」という共通のキーワードを用いてHawthorne、Whartonの描き分ける女性像の特徴を比較検討した。取り上げられた作品はHawthorneの*The Scarlet Letter*、*The Blithedale Romance*、*The Marble Faun*等、Whartonの*The House of Mirth*、*The Age of Innocence*、*Ethan Frome*等であった。司会者にとってWhartonは不案内な作家であったが、これを機会に幾つかの作品を読み、その抑制の効いた女性像に、Hawthorneの描くHesterの場合と同じくニューイングランド精神を色濃く感じ取ることができた。

西前孝氏の「テキストの中の社会改革—*The Blithedale Romance*の場合—」は、Hawthorneが実際に参加したユートピア共同体Brook Farmでの体験をモチーフとして書き上げた*The Blithedale Romance*を取り上げ、同時代のさまざまな社会改革運動の中でも禁酒・節酒運動に対するHawthorneのスタンスを明らかにするものであった。すでにHawthorneは*The Blithedale Romance*に先立つこと15年前に、短編“A Rill from the Town Pump”の中で町のポンプに語らせることにより、禁酒運動の旗手たちを揶揄している。

ところで、Hawthorneが*The Blithedale Romance*を出版した1852年は奴隷制廃止運動とあいまって禁酒運動が最も先鋭化した時代であった。こうした時代背景を考え合わせると、たとえフィクションの中とはいえ、公然と禁酒運動を批判し、酒の効用を説くことはかなり勇気のいることであっただろう。一人称の語り手Coverdaleをして語らせる酒、とくに葡萄酒に関するパラノイアックなまでの言説は、Coverdaleを酒神バックスと重ね合わせて読むことも可能にする。

西前氏が明らかにするHawthorneの禁酒・節酒運動に対する態度表明は、“all or nothing”に傾く禁酒運動家たちの熱狂に対し、バランス感覚の重要性を示すことではなかろうか。そしてこのこと自体立派な政治的発言であり、社会参加でもある。

以上、4名の方々の発題についての蛇足的なまえがきになってしまったが、どうやら21世紀の今、Hawthorneを読み直す意義は十分ありそうである。今後も、Nathaniel Hawthorneという作家は「古くて新しい」作家であり続けるだろう。

1. 19世紀版「丘の上の町」—— ホーソンとシェーカー ——

城戸光世

アメリカン・ルネサンスの作家たちが活躍した19世紀前半から中葉にかけてのアメリカは、共同体実験の黄金時代とも呼ばれ、100以上の共同体が建設され、10万人以上の男女や子供たちが参加した時代でもあった。このような理想共同体建設の盛んな時期に作家として活躍した Nathaniel Hawthorne は、社会進歩思想や社会改革運動に対して否定的だったと多くの論者が指摘しているが、しかしよりよい世界を希求する理想共同体での生活に対して、若い時からかなりの関心を示していた。20代の頃シェーカー教徒の村を訪問した際には、そこへの参加を考え、またユートピア建設運動が最も盛んだった1840年代には、実際に理想共同体の一つに参加して、その体験に基づいたロマンスを執筆している。

現在アメリカでわずかに残るだけとなったシェーカー教徒の共同体に、ホーソンは何度か訪れ、彼らを描いた二つの短編を残した。ホーソン以外にも、SedgewickやHowellsがシェーカー共同体の登場する作品を書いており、またEmersonも彼らに何度も言及し、Melvilleの作品でもシェーカー教徒が登場する。本発表では、このように19世紀アメリカ文学者たちの想像力に影響を及ぼしたシェーカー教徒とその共同体に、同時代に生きたホーソンがどう関わったのかを概観し、彼のユートピア観を探る一助としたい。

I 1830年代のホーソンのシェーカー体験

シェーカー教徒、正式にはUnited Society of Believers in Christ's Second Appearingの教祖Mother Ann Lee (1736-1784) は、20代の頃イギリスで神の啓示を受け、1774年夫や親族など総勢9人でアメリカに渡り、New York州で布教を始めた。1780年代末最初に共同体ができたのを皮切りに、90年代にはニューイングランド各地にシェーカー共同体ができていき、19世紀に入って当時の西部で宗教復興運動が起こると、シェーカーに加わる人々も増え、全米各地にシェーカー共同体が設立されていく。19世紀には20弱のシェーカー共同体が存在し、1830年代から40年代の絶頂期には、男女子供合わせて5000人以上が参加していたといわれる。

エマソンが最初にシェーカー村をNew Hampshire州Canterburyを訪ねたのは、ちょうど彼らの共同体が東部で際立った存在感を持つようになっていた1828年で、ホーソンが最初に同じ共同体を訪ねたのも、Salemの実家で文学修行をしていた1831年と、ちょうど彼らの絶頂期が始まる頃であった。シェーカー教徒たちは当時広く俗世間から訪問者や見学者を受け入れており、1870年代に全米各地のユートピア共同体を訪れその観察記を出版したCharles Nordhoffによれば、特にエマソンやホーソンが訪れたカンタベリの共同体は、一大観光地とすらなっていたという。ホーソンが訪れた頃のカンタベリのシェーカー村は、2500エーカーの土地に100以上の建物があり、

240人以上のメンバーが暮らしていた。彼らの教義には、その世間からの隔離や、指導者を男女双方から選ぶ男女平等主義、独身主義、財産の共有、そして礼拝におけるダンスの採用などがあったが、この独特なシェーカーの習慣や生活に対する大きな社会的関心は、様々な訪問者の記録からも窺い知れる。

ホーソーンの彼らへの強い関心は、最初にその村を訪れた際の手紙からも読み取れる。彼は特にその豊かな生活に感銘を受け、「彼らは快適ないい生活をしていて、ばかげた儀式さえなければ、彼らに参加する以上に賢い選択はないだろう。僕が会話した人たちは知的で幸せそうだった。彼らにシェーカー教徒のメンバーになることを話してみたけど、その点では決心がつかなかった」(CE XV, 213)と妹に書き送ったほどであった。またその数週間後、結婚を間近に控えた従兄に送った手紙でも、当時広がっていた宗教復興的な傾向に触れた後、シェーカーに入る考えを持っていると語っている。ホーソーンは、彼らの快適な生活は気に入ったが、そこへの参加は結婚生活を試してみても遅くないかもしれないと伝えた。(CE XV, 218)

このカンタベリーのシェーカー村訪問からセイラムに戻ったホーソーンは、図書館で彼らについての本を借り、より深く調べた上で、“The Canterbury Pilgrims”と“The Shaker Bridal”という二つの短編を書き上げた。どちらの物語においても中心的テーマは明白であり、自己実現のためには人間の愛情が必要であるというメッセージが読み取れる。作品中にホーソーンが示す、シェーカー村に加わろうとする人々の動機に対する深い洞察は、このときの様々な資料の調査と実際の体験との相乗の効果から生み出された。しかしこのように俗世間で失敗した人々が避難場所として選んだシェーカー教徒の共同体は、作中語り手によって、「それまでのあらゆる情愛の絆とか社会の絆が断ち切れ、昔の身分や貧富の差もなくなり、感情抜きで冷やかな安心が人間らしい希望と恐怖にとって代わる」もので、「浮世に見捨てられ倦み疲れた者の逃げ込むもう一つの避難所、お墓の中と変わるところがない」(CE XI, 131)と語られる。

1831年に実際にその目で見てシェーカー共同体に加わろうかとさえ考えたホーソーンの好意的な印象と、このシェーカーに批判的な30年代に書かれた二つの物語との差、すなわちSeymore Grossのいう「態度の矛盾」(Gross 458)については、グロスをはじめ、Rita Gollin、John Lauberなど、シェーカーとホーソーンの関係について論じた多くの研究者が様々な分析している。その理由の一つとしては、グロスの言うように、ホーソーンがシェーカー村訪問から戻って読んだという、1812年に出版されたThomas Brownの*An Account of the People Called Shakers*の影響があるだろう。この本には、夫と妻、親子や兄弟姉妹など、あらゆる自然な愛情を壊そうとする様々な試みがシェーカーの共同体にはあると書かれており、そのような人との絆、愛情を断ち切ることこそ、“The Gentle Boy”などホーソーンの他の初期作品にも見られるように、彼がもっとも批判する点であった。実際はどうであれ、ホーソーンが目に見るようになったシェーカー教徒たちは、人の心の神聖さや、この世界に場所を確立する手段としての人の愛情や絆など、ホーソーンが当時もっとも重視した点をおざなりにしていると感じられたのであろう。

II 墮ちた楽園：1840、50年代のホーソーンのシェーカー観

ホーソーンのシェーカーへの批判的な見解は、エマソンら超越主義者たちが社会改革運動へ

の関心から彼らの共同体への関心を強めていくのと対照的に、厳しいものとなっていく。1841年、ホーソーンはユートピア共同体Brook Farmに参加するが、結局半年のみの滞在で去ることになる。その翌年、Sophiaとの結婚後初めてホーソーンがConcordの新居を離れたのは、隣人エマソンに誘われて、Harvardにあったシェーカー村を訪れた時であった。ホーソーンはほとんどこの時の印象は覚えていないようだが、一方エマソンは、既にコンコードから一番近いこのシェーカー村には何度も訪れ、彼らの共同体に社会主義の実験としての重要性を認めていた。40年代のホーソーンは、シェーカー教徒の教義は愚かしく、人間性を歪めるものだとして批判的に見ていたとしても、エデンにいるアダムとイブにすら例えるほど幸せなソファイアとの結婚生活を送る彼にとっては、世間から孤立して生きる彼らは、自分とまったく無関係な存在と見なしていたのであろう。しかし彼はその10年後、再びシェーカー教徒の村を訪れ、より激しい拒否感を示すようになる。

1851年、セイラムの税関を誹首され、最初の長編The Scarlet Letterを出版した後、ホーソーンは妻子を連れMassachusetts州西部のLenoxに移住する。そして生まれた次女RoseをPeabody家の両親に見せるため、ソファイアは長女Unaを連れて数週間留守にし、その間彼は5歳の息子Julianと二人で残されることとなった。その父子の元にメルヴィルと出版者Duyckinck兄弟が訪れ、彼らは同じBerkshireにあったHancockのシェーカー村を訪れる。この時の訪問の記録に見られる彼のシェーカー批判の厳しさは、30年代の牧歌的なシェーカー村訪問記とは全く異なったものであった。

ホーソーンは彼らの住居に浴槽がないと知って、彼らの清潔さは見かけだけのもので、「不潔な集団」(CE VIII, 465)だと断罪する。またその生活にプライバシーがほとんどないことを大きく非難し、彼らの共同体が早く廃れてしまえばよいとまで語る。ゴリンはこの非難の激しさを、若く経済的にも精神的にも家族に依存していた自身のナイーブさを批判する気持ちが背後にあったのだらうと推測する。また1851年は、アメリカの楽園を目指すユートピア実験の熱が過去のものとなり、シェーカー教徒たちもその人口や重要性を失い始めた時期であった。ユートピア建設運動の盛衰を間近で見てきたホーソーンにとって、シェーカーのような宗教的ユートピアにも、またブライズデイルのような社会主義的ユートピアにも欠けているのが、人と人との愛情と信頼で結びついた自然な絆であると強く感じたのであろう。ゴリンも論じているように、結局ホーソーンにとって「唯一望ましいと思われた共同体は・・・ずっと私的なもの、すなわち幸せな結婚が作る共同体」(Gollin 64)だったと言えるのかもしれない。そのような幸福な私的共同体はホーソーン作品にはほとんど登場しない。しかしそれゆえにこそ、ホーソーンにとって愛情で結びついた幸せな家族は、稀で貴重な、真の意味での理想的なユートピア共同体だと見えていたのではないだろうか。

引用文献

- Gollin, Rita, K. "Hawthorne Contemplates the Shakers, 1831-1851," *Nathaniel Hawthorne Journal*, 1978, 8, 57-65.
- Gross, Seymore L. "Hawthorne and the Shakers," *American Literature* 1958, 29. 457-463.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-1997.

Lauber, John. "Hawthorne's Shaker Tales," *Nineteenth Century Fiction*, 1963 June, 18 (1), 82-85.

Nordhoff, Charles. *American Utopias*. Stockbridge, Mass: Berkshire House, 1993. Originally published as *The Communistic Societies of the United States*, 1875.

2. *The Scarlet Letter* と *Beloved* — 「スレイヴ・ナラティヴ」の観点から

藤 吉 清次郎

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) の *The Scarlet Letter* (1850) に関する批評については、近年、作品に19世紀中葉の黒人奴隷制問題を読み込む評家が少くない。例えば、Jonathan Arac や Sacvan Bercovitch などの研究者は *The Scarlet Letter* の有する曖昧性を、奴隷制廃止を訴えなかったホーソーンの政治的姿勢に絡めて論じている。中でも注目したいのは Hester を黒人奴隷とする刺激的な解釈を展開する齋藤忠利氏の見解である。ピューリタン社会で奴隷のごとく拘束状態に置かれた Hester とその娘 Pearl 親子を念頭におけば、ホーソーンが黒人奴隷の母娘を意識して、このふたりの女性の人物造型をした可能性も十分あり得る。Leland Person が指摘するように、ホーソーンは19世紀当時、流布していたスレイヴ・ナラティヴを意識していたのではないと思われる。本発表では、まずスレイヴ・ナラティヴの観点から、*The Scarlet Letter* の Hester と Pearl の母娘の人物造型に検証を加え、ホーソーンの奴隷制への見解を考察したい。その上で、現代アフリカ系作家トニ・モリソン (Toni Morrison, 1931-) の *Beloved* (1987) との比較考察を行いたい。というのも、文学評論集 *Playing in the Dark* (1992) で分かるように、モリソンは白人作家ホーソーンの黒人表象に不満を抱いているからである。本発表では、スレイヴ・ナラティヴの観点から、モリソンの *Beloved* がホーソーン *The Scarlet Letter* への批判の書と成り得ていることをも論究したい。

1. 記号としての黒人 Hester と Pearl

スレイヴ・ナラティヴは奴隷制下、主体と自由を奪われた黒人奴隷の苦悩と悲惨さを綴ったものである。黒人奴隷の中でも、子を持つ女性は想像を絶する苦悩を抱え込んだ。奴隷の母親のなかには、自らの子供の将来を案じ、我が子を殺害したのも少なからずいたという。*The Scarlet Letter* の Hester もまた、時として、その母性故に凶暴な様相を帯びる様子が描かれている。例えば、Pearl が7歳のとき、ピューリタン社会において孤絶状態にあった Hester は娘の将来を案じ、彼女を殺してしまおうという衝動に駆られる。ホーソーンは愛するが故に、子殺しを犯しかねない危険な母性愛を描き出しているわけであるが、この作家は Hester に、奴隷の母親が味わった孤絶、母親としての苦悩を経験させる一方で、彼女に不当な扱いを受ける女性の意見を代弁させることによって、体制を糾弾する。作品が書かれた時代背景も念頭におけば、ホーソーンは記号としての黒人 Hester という女性を通じて、奴隷制度を容認する社会を批判しているようにも思われる。

しかし、ホーソーンは Hester に体制批判をさせながらも、結局すべてを「神慮」にその判断を委ね、来たるべき時を待つべきという考えを表明させることになる。Hester が黒人奴隷をイメー

ジした存在であると想定した場合、この女性の考えに、奴隷制解決の在り方に関するホーソーンの見解を読み取ることができる。Hester の考えは、ホーソーンが大学時代の同級生フランクリン・ピアス (Franklin Pierce) の大統領選挙用パンフレットの中で表明した、奴隷制度を悪としつつも、その解決をあくまで神慮に任せるべきであるとする考えと通底する。この点、物語の結末で Hester が混血の娘 Pearl を、人種差別がアメリカほど厳しくなかったヨーロッパへ連れて行くという設定はある意味、物語的解決であったと言えるだろう。

以上のように見てくると、ホーソーンは *The Scarlet Letter* を創作するに際し、当時流布していたスレイヴ・ナラティヴを意識し、その枠組みを取り入れたと思われる。しかし、この白人作家は真の意味でスレイヴ・ナラティヴを理解していたのであろうか。Hester に幼児殺しを実行させず、最終的に彼女を体制に服従させる物語設定は、彼が苦悩する奴隷の母親の苦悩を十分には理解できていなかったことの証ではないか。

2. *Beloved* における Sethe と Beloved

モリソンが *Beloved* を執筆した動機のひとつは、数多く書かれたスレイヴ・ナラティヴに対する不満である。確かに、公にされたスレイヴ・ナラティヴの多くには奴隷制下において自由と権利を奪われた黒人奴隷の悲惨な状況が描かれていた。しかし、そのような伝統的なスレイヴ・ナラティヴは奴隷たちの経験や思いをストレートに語ったものではなかった。つまり奴隷たちの悲惨な経験は、“too terrible to relate” であったために、白人読者の上品さに合わせるように編集されなければならなかった。黒人のたちのスレイヴ・ナラティヴは奴隷制が有する悲惨な局面が隠蔽され、一般大衆の目に触れないようにされてきたのである。

モリソンは *Beloved* において、そのような従来スレイヴ・ナラティヴでは描かれてこなかった真実を描き、奴隷制の非道さを改めて問い直そうとしたのである。この物語では、黒人奴隷たちが被った精神的・肉体的な虐待が赤裸々に描き出されているが、モリソンは奴隷制下で最も悲惨な経験をした存在として、子をもつ奴隷の女性を取り上げる。主人公である黒人奴隷 Sethe は奴隷農園から逃亡する途中、我が子 Beloved を殺害してしまう。その殺害の理由は娘を憎んでいたからではなく、娘を真に愛していたからである。つまり Sethe は娘を殺害することによって、自分が歩んだような悲惨な道を歩ませたくなかったのである。

Sethe は「濃い愛情」故に、娘を殺害したわけであるが、むち打たれ、無感覚になった彼女の背中が象徴するように、彼女は過去を抑圧し、封印している。物語の中で Sethe が果たすべきは、幽霊として彼女のもとにやってきた娘 Beloved との関係のなかで、どれほど悲惨であろうとも、過去を直視し、過去を乗り越え、自身を赦すことである。物語結末において、Sethe は烈しい葛藤の末、ひとりの人間として新たな出発をすることになる。

3. モリソンとホーソーン——スレイヴ・ナラティヴを巡って

Playing in the Dark (1992) の中で、モリソンはハーマン・メルヴィル (Herman Melville) やホーソーンなどの白人作家が黒人表象を白人の内面を描くために文学的シンボルとして利用している

と述べているが、彼女は黒人をそのシンボルから解放し、彼らに人間としての「声」を与えることが作家としての重要な責務のひとつだと考えている。この作家は真のスレイヴ・ナラティヴを創造するために、「濃い愛情」のために我が子を殺害しなけりばならなかつた奴隷の女性の内的葛藤を克明に描き出したのである。

もちろん、モリソンの唱えるスレイヴ・ナラティヴは、単に白人批判をねらっただけのものではない。モリソン自身、奴隷制を巡り、アメリカ人が“national amnesia”に陥っていると述べており、その批判の目は自らの過去を直視できていないSetheに代表される黒人たち含むアメリカ人全体に向けられていると考えられる。その点、モリソンが*Beloved*の中で使用する“rememory”という言葉は、奴隷制に関して失った記憶を再び記憶し直すことを読者に要請するものであろう。*Beloved*は黒人奴隷制問題を扱うだけでなく、その扱い方そのものを問題にする「メタ・フィクション」的な小説であり、その意味でこの作品はポスト・モダン的な「スレイヴ・ナラティヴ」と呼べるかもしれない。

以上のようなモリソンのスレイヴ・ナラティヴをホーソーンの「編集された」スレイヴ・ナラティヴと比較検討するとき、その差異は明らかであろう。Setheの苦悩とHesterの苦悩を比較考察するとき、私たちは白人作家ホーソーンの黒人表象の限界を認識するとともに、黒人女流作家モリソンがアメリカ社会に向けて発した重いメッセージをしっかりと受け止めざるを得ないのである。

Works Cited

- Arac, Jonathan. "The Politics of *The Scarlet Letter*." In *Ideology and Classic American Literature*. Ed. Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen, 247-66. New York: Cambridge UP, 1986.
- Bercovitch, Sacvan. *The Office of The Scarlet Letter*. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1991.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 23vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Henderson, Mae G. "Re-Membering the Body as Historical Text." In *Toni Morrison's Beloved: A Casebook*. Ed. William L. Andrews and Nellie Y. McKay. New York: Oxford UP, 1999.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. NY: Penguin Books, 1998.
- _____. *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Daniller Taylor-Guthrie. Jackson: University Press of Mississippi, 1994.
- _____. "The Site of Memory." In *Inventing the Truth: The Art and Craft of Memoir*. Ed. William Zinsser. New York: Houghton Mifflin Company, 1998.
- Person, Leland S. "The Dark Labyrinth of Mind: Hawthorne, Hester, and the Ironies of Racial Mothering." In *The Scarlet Letter and Other Writings*. Ed. Leland S. Person. NY: W.W. Norton & Company, 2005. 656-669.
- 齋藤忠利「ホーソーンにおける黒人問題」『帝京国際文化』第14号 帝京大学国際文化学部紀要 (2001年2月)、1～20頁

3. イーディス・ウォートンとホーソーンの作品に表れる女性の描き方

上 田 みどり

はじめに

Nathaniel Hawthorne (1804-1864) と Edith Wharton (1862-1937) の作家生活にはおよそ半世紀のずれがある。その中で、二人の作品の底流に流れる精神性は、ニューイングランドの風土に通底する特質を感じる。

ホーソーンが、アメリカ建国期のピューリタンの倫理性を特質とする時期の、アメリカ社会と個人の関係を描いたことは、みな知るところである。そしてイーディス・ウォートンは、19世紀後半ニューイングランドに生まれ育ち、20世紀初頭、Henry Jamesを師と仰ぎ、その次世代作家となる。このイーディス・ウォートンという女性作家の作品には、ホーソーン的なものと、ジェームズ的なものが混在する。本発表は、19世紀後半から20世紀のアメリカ社会と個人の特徴を探り、ウォートンとホーソーンの作品に表れるニューイングランド的なものを見据えながら、両作家の女性の描き方の特徴を比較検討する。

1. 幼少期の類似

ホーソーンは幼少期、足をいため約三年間、屋内で読書にふけったという実話はみな知るところである。一方、ウォートンが、当時の富裕階級でよくあるように、家庭教師を雇い、厳しい母親の監督のもとに教育されたことは、特徴的であると同時に、病気がちの彼女に、両親は学ばせることより健康を案じていたことが、自伝に記されている。これら両作家共、古典を読み、思索的な資質を培われながら日々を過ごし、その文学的素養が、後の彼らの作家活動の滋養となったであろうことは言うまでもない。ウォートンは、少女期、父親の書齋で過ごした思い出を自伝 *A Backward Glance* で語っている。

その中で、ニューヨークについて、ウォートンは、戸外は単調な通り、建物もなく、ヨーロッパにあるような大聖堂もなく、歴史的な過去を伝える建物が無いことを嘆く。このことは、ホーソーンがかつてアメリカには、古城もなく、想像力を掻き立てるものがないと嘆いたことを思い出させる。ウォートンは1866年から六年間、滞在したヨーロッパで、重く深い歴史と文化の影響を大きく受けたと著書に記している。

2. ホーソーンの描く女性

ホーソーンの代表的作品に登場する女性主人公、*The Scarlet Letter* の Hester Prynne、*The*

*Blithedale Romance*のZenobia、*The Marble Faun*のMiriam、また、短編 '*Rappaccini's Daughter*' のBeatriceには、外見の古典的屬性である、ダークなイメージが付与され、これらの女性は、閉ざされた世界の中にありながら、他の登場人物を圧倒せんばかりの生命力溢れる生き活きた場面を作る。

ホーソーンの代表作、*The Scarlet Letter*の中、生命力溢れるHester Prynneがいるのに対して、相手の牧師Dimmesdaleはピューリタン社会の中でしか生きられず、死をもって精神が解放される。また、Hester Prynneの行動は、娘Pearlのいる海の向こうの世界、ヨーロッパに向かったのが再びニューイングランドの地に戻ってくる。つまり、ホーソーンは、社会の掟に背いた者は、去らねばならないことを提示するが、彼女の責任の取り方を、再度ニューイングランドに戻ることと暗示している。

また、短編 '*Rappaccini's Daughter*' のBeatriceのように、温室花壇に住む、毒性を持つ女性の意味するものを描く。植物（花）が女性（Beatrice）のセクシュアリティと結び付けられているのは、19世紀においてすでにステレオタイプ化している。前述の*The Scarlet Letter*のHesterが娘Pearlを抱いて登場するのは、薔薇の茂みに囲まれた牢獄からであるのも周知された例である。

このことは、当時の現実社会において、大胆奇異とみえたり、反社会的、むしろ官能的生命力溢れる彼女たちにあって、背後に潜む「原罪」や「先天的墮落」から人間は逃れられないとホーソンは見抜いてもいて、真実を語ろうとするその世界は陰気で邪悪に満ちている。

しかし、ホーソンは1840年代に、代表的な超越主義者と交際しており、負の方向に向かう運命も、ある程度人間の善の力で調整できると信じているわけで、社会の既成概念を自己の規範とするのではなく、個人の思考に求める。作品の舞台設定である17世紀は、アメリカ・ルネッサンスの担い手となる超越主義に窺えるロマンス的な要素を反映するヒロインの異質性が強調され、ロマン主義の楽観主義的歴史観や極端な個人主義とは相容れない要素が描かれているように思われる。また、ホーソン作品における*The Blithedale Romance*や*The Marble Faun*のように、ホーソン独自のneutral territoryでは、この反社会的な女性主人公たちと拮抗する存在、天使的存在の女性を登場させることも必然なのである。

3. イーディス・ウォートンの描く女性

イーディス・ウォートンの作品には、激動するアメリカ資本主義経済勃興の時代兆候が見え隠れする。変化の激しい経済環境の中で社会的に落ちぶれてゆく過程にあつてなお、ピューリタンの倫理性を捨てない、ニューイングランド魂を持つ女性たちが描かれる。醜悪なものを嫌い、不快なものに背を向けず一端立ち向かおうと努力する、高い倫理性を持つ女性をウォートンは描く。

例えば、*The House of Mirth*のLily Bartは、若い女性にありがちな収入を超える贅沢を求めるが、卑屈な振る舞いをするわけではなく、決して倫理的破滅に落ちない。自己犠牲、忍従、社会秩序といった中に矜持と高潔性を最後まで忘れない。この個人と社会の関係が極めてニューイングランドの独自性を示すように思われる。

また、*The Age of Innocence*の中、貴族社会の約束事はあるが、Ellen Olenskaにしても、彼女を

取り巻くNewland Archerとその妻May Wellandも倫理的破滅に陥ることはない。Ellenが言う、不誠実や欺瞞、残酷さや無関心といったものは、作家ウォートンが嫌うヨーロッパ貴族社会での概念でもある。

かつてピューリタン社会でのHester Prynneが、ヨーロッパに一時期出ては行ったが、再び責任を取るべき場所、アメリカに戻るのと同様、Ellenはニューヨークで受け入れられないで、再びヨーロッパに戻る。後にNewlandにその場所を訪れさせ、その行動を作者自ら語ることをせず、結末は読者に明け渡している。限られた範囲、閉ざされた社会を舞台として提供されながらも、Ellenの責任を取る場所をヨーロッパとしたのは、歴史と伝統を重んじる作者の共感する場所を提示するためであろう。

また、*The House of Mirth*において、主人公Lily Bartは、経済的困窮のため、最後死を選ぶほかない状況になるわけだが、敬愛するSeldenは、その時、究極の真実を知ることになる。

汚れを知らぬ清らかな名前のごとく、非生産性の象徴である主人公Lilyは、借りた金を返し続け、道徳的に高い位置はくずさない。

ウォートンの作品の中でも異質な独自性を著しているのが、*Ethan Frome*と、*Summer*である。舞台は、レノックスの、見捨てられた貧しい村の中。ウォートン作品の二種類の内の、一つの種類に属する作品*Ethan Frome*では、主題は個人と社会との葛藤である。村を出ようとして失敗した証である、足をひきずるEthanの姿は、彼の現状説明を読者にさらけ出すことにもなる。ここでの妻Zeenaは外見上、暗いNew Englandの環境を象徴する人物である。灰色の顔面に頬骨は高く愚痴を言う以外は無口である。Ethanにとって、彼女の沈黙を意味するものが、潜在的恐怖を与える負のイメージで印象的である。一方Mattieは若く明るく健康的ではあるが、Ethanにとって、幻想でしかない。Mattieが帰される前、自殺的行為の二人で乗ったそりが、大木にぶつかり、二人は障害者になってしまう。その介護をするのが、再び妻のZeenaである。結局Ethanは、妻Zeenaの支配を一生逃れられない。

結び

根雪の寒さ、冷たく輝く星、季節の移り変わりに伴う光と闇の中、日常の自然に密着したニューイングランドの田舎の村に住む人たちの、沈黙の閉ざされた狭い村、時にはグロテスクなほど残酷で、言葉にし難い風土を背景に、登場人物は生きる苦悩と忍従に徹していて、ウォートンはこれらを、ニューイングランドの断片的特徴として提示しているように思われる。

ホーソーンの生きた19世紀からウォートンの20世紀へと時代は少しずつ動き、社会と個人の意識変化も確実に進んでいるが、作家の鋭く先を見据える鑑識眼は、時代の変容にへつらうことなく、女性主人公たちに、倫理的矜持を保たせながら、社会の裏に潜む隠された真実の不思議を見つけ出している。

引用・参考文献

Emerson, Ralph Waldo. "Self Reliance" In *Emerson:Essays & Lectures*. The Library of America. New York

Literary Classics of the United States. Inc., 1983.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne I.* Ohio: Ohio State University Press, 1964.

Wharton, Edith. *The Age of Innocence. The Complete Works of Edith Wharton.* Vol. XIV. Kyoto: RINSEN Book Co., 1988.

———. *A Backward Glance.* N.Y.: Charles Scribner's Sons, 1964.

———. *The House of Mirth.* Norton Critical Edition: W.W. Norton & Company, Inc., 1990.

ヴェブレン、ソースティン 『有閑階級の理論』 高哲男訳、筑摩書房、1998.

武田悠一 「アレゴリーの毒—『ラパチーニの娘』あるいは読みのポリティック」『英語青年』
Vol. CXLI, No.10, pp. 546-50、研究社、1996.

丹羽隆昭 『恐怖の自画像 ホーソーと「許されざる罪」』 英宝社、2000.

4. テクストの中の社会改革 ——*The Blithedale Romance* の場合——

西 前 孝

歴史書によると、19世紀半ばの北米を中心とする社会は、都市化と人口流入という社会変動のなかで、様々な問題を露呈し始めていた（有賀 320）。この時期のアメリカにおいて展開を見た幾つかの社会改革の動きとして、節酒・禁酒運動、教育改革、女権拡張運動、ユートピア共同体建設、そして奴隷制廃止運動などを挙げることができる（Tindall 544-57）。

この時代は、ちょうど作家ナサニエル・ホーソーン（以下、NH。1804-1864）の同時代に当たっている。それら諸問題が彼の作家としての活動に何ほどの影響を与えたのは自然なことであろう。NH文学は一般にアレゴリー的性格の強いものであるため、現実社会の問題が見えにくくなっている事情は確かにあるが、近年研究者たちは、文学と歴史との関係に強い関心を向けつつ、NH文学に対しても、そのアレゴリーのヴェールを精力的に剥がしている。

今回取り上げる *The Blithedale Romance* (1852。以下、BR) は、NHの諸作品のなかにあつて、作家の同時代を舞台にしているために、社会問題との関係が比較の見えやすくなっている。G. Ripley が主導した社会主義的実験農場 Brook Farm（以下、BF）や Fourierism、作中人物 Hollingsworth（以下、H）の目論む犯罪人更正施設建設、Zenobia（以下、Z）の主張する女性の権利の拡張、Priscilla（以下、P）を霊媒として行われる mesmerism や homeopathy といった疑似科学の流行などである。

それら同時代的諸問題のうち、以下本論においては、とくに節酒・禁酒の問題に焦点を絞って、NHの発言を検証してみたい。NHにおけるアルコール飲料（以下、酒）への関心は、従来も批評家・研究者たち（Turner 13; Wagenknecht 122-23）が指摘するところがあったし、また、NH文学一般における酒の問題あるいは酩酊（intoxication）の問題を本格的に論じたものとしては Nicholas Warner, *Spirits of America—Intoxication in Nineteenth-Century America*（University of Oklahoma Press 1997）がある。ただ、この書物は、酩酊の問題を想像力の問題あるいは創作衝動の問題との関係に重点を置くものであつて、本日の課題すなわち社会問題との関連に焦点を当てたものではないことを確認しておきたい。

NH自身の飲酒にまつわる早い時期のエピソードとして、Bowdoin 大学生時代に、学則を破ってワインを飲み、そのために罰金を科せられたことが知られている。これは処女作 *Fanshawe* (1828) にもデフォルメされて取り込まれているが、以下では、BRの中にNHの酒をめぐる若干の発言を取り上げて、その発言の社会的・時代的コンテクションを検証したい。

作品第2章で、一人称の語り手を兼ねた作中人物カバデイル（以下、C）が、実験農場ブライズデイルに向けて出発する際、Boston 市中の独身者アパートの部屋をあとにした際の記憶を回想する一節があるが、この記述にはCの何やらアンビバレントな心理が透けて見えるようだ。“a better life”を求めて出かけるに当たって、残していかなばならない結構な品物たちに未練を感じ

ている。この未練は、作品のその後の展開の中でたびたび言及される酒への思いを貫くものであることが確認される。

BLの空気が性に合ったらしいPのはしゃぎぶりについてのZのコメントは、比喩表現を使ってなされているのだが、陽気にはしゃぐPの姿はワインのひと啜りの効果との連想に置かれている。この世の中をパラダイスであるかのように感じさせるワインの作用は、女権論者Zには確かに許しがたいことなのであろうが、これをそばで聞いているCとしては、ひいてはNHとしては、いかんともし難いこの世の不幸の中にあって、酒がひととき心を陽気にさせてくれるのなら、それを目の敵にして、男社会とひと括りにしてこの世から葬り去ることもないだろう、と言いたげなのである。

作品第12章でCは、農場での仕事の疲れを癒すためもあって、森を少し入ったところにある木の上に「隠れ家」を作り、しばし一人だけの時間を楽しんだことが述べられている。葉巻をくゆらしながら周囲を眺めていると、辺りの木にブドウの蔓が絡み合っているのが目に入る。これが彼に一つの連想を働かせた。酒もタバコも控えることがこの種の共同体の理念であったであろうから、その掟を破って（掟の及ばない場所を確保して）、彼は一人「個人的自由」をエンジョイしているのである。これは、いささかオーヴァーに言えば、個人の自由を幾らか犠牲にしてでも建設しようとしている共同体の理念からの一時的回避・逃避・逸脱行為にはかならない仕儀なのである。

第21章に次のような1節がある。

At my first entrance, old Moodie was not there. The more patiently to await him, I lighted a cigar, and establishing myself in a corner, took a quiet, and, by sympathy, a boozy kind of pleasure in the customary life that was going forward. Human nature, in my opinion, has a naughty instinct that approves of wine, at least, if not of stronger liquor. The temperance-men may preach till doom's day; and still this cold and barren world will look warmer, kindlier, mellower, through the medium of a toper's glass; nor can they, with all their efforts, really spill his draught upon the floor, until some hitherto unthought-of discovery shall supply him with a truer element of joy. The general atmosphere of life must first be rendered so inspiring that he will not need his delirious solace. The custom of tipping has its defensible side, as well as any other question. But these good people snatch at the old, time-honored demijohn, and offer nothing--either sensual or moral--nothing whatever to supply its place; and human life, as it goes with a multitude of men, will not endure so great a vacuum as would be left by the withdrawal of that big-bellied convexity. The space, which it now occupies, must somehow or other be filled up. As for the rich, it would be little matter if a blight fell upon their vineyards; but the poor man--whose only glimpse of a better state is through the muddy medium of his liquor--what is to be done for him? The reformers should make their efforts positive, instead of negative; they must do away with evil by substituting good.

これはCがZとPに関する情報を得ようとして、この二人の女性の父親であるムーディ老人をボストンの町中のレストランで待っている件である。この小説の中にあって、酒に関する言説のい

わば圧巻ともいうべき一節となっていることに注意したい。尤もその主張そのものは一読して解る話であり、特に解説は必要でないようだ。

同じレストランの中でCは、酒を楽しむ周囲の客たちを観察しながら、酒の効用についてひとくさり自説を開陳しているが、そこには俗説以上のものは何もなさそうである。ただ、三流詩人は三流詩人なりに、ここでどうしても酒の効用を擁護しておかすにはいられなかったのであるう。

我々読者としては、これら一連の酒にまつわる言説の中に、人間と社会と文明をと見据える視座から、CすなわちNHが同時代の喧しい節酒・禁酒の叫びに対して、彼なりのささやかな反論をしているものと受け止めておきたい。

「小異を捨てて大同につく」というクリシェイがあるが、その意味が「社会的・公共的価値のためには個人的価値意識を断念する」ということであるなら、NHはこれには全面的に賛成することができなかったようだ。Puritanismに対してもTranscendentalismに対しても一定の距離を置いたNHの姿勢は、節酒・禁酒を含む諸々の社会改革の動きに対しても同様であった。人間存在にとって宿命とも言うべき個人と社会のパラドックスを、ほかならぬ自らの個性をテコにして止揚してみせることこそ、彼の芸術家としての使命であったろうから。

参考文献

- Tindall, George Brown. *America - A Narrative History*. W. W. Norton and Company, Inc., 1996
- Turner, Arlin. "Introduction" to *The Blithedale Romance*. W. W. Norton and Company, Inc., 1996.
- Wagenknecht, Edward. *Nathaniel Hawthorne: The Man, His Tales and Romances*. Continuum, 1989.
- Warner, Nicholas O. *Spirits of America - Intoxication in the Nineteenth-Century American Literature* (Norman and London: University of Oklahoma Press, 1997).
- 有賀貞他編『アメリカ史1 17世紀—1877年』弘文堂、1987年。
- 森岡裕一他『酔いどれアメリカ文学——アルコール文学文化論——』英宝社、2000年。
- 森岡裕一『飲酒/禁酒の物語学——アメリカ文学とアルコール——』大阪大学出版会、2005年。

スコット・スロヴィック／伊藤詔子／吉田美津／横田由理 編著

『エコトピアと環境正義の文学』

（晃洋書房、2008年1月、337+27pp、本体4,500円）

上岡克己

本書はエコクリティシズム研究会が「エコトピア」、「ディストピア」、「環境正義」をキーコンセプトにネイチャーライティングや環境文学を論じたものである。全体は四部構成で、第Ⅰ部「アメリカ文学とユートピア言説の構築」、第Ⅱ部「環境正義と新しい西部の風景」、第Ⅲ部「都市と幻想のエコトピア」、第Ⅳ部「新たな場所の出現」からなり、22編の論考が収められている。執筆者の多くが本学会会員であること、および日米共同研究の一環であることは注目したい。「はじめに」において編者が各論考を簡潔に要約しているの、ここでは重複を避け、書評子が特にいろいろと教えられ、考えさせられた第Ⅱ部「環境正義と新しい西部の風景」に納められた5編についてのみふれることにする。

第7章、真野剛「ジョン・ミューアの求めた聖地の変容——国立公園のポリティックス——」は、エコトピアとしての国立公園の問題を主にミューアをとおして分析する。筆者の言うように、ミューア等によって神格化された自然が文明にとりこまれ、「アメリカ政府の不安定で安易な公地政策において、国立公園が常に管理されたディストピアの空間になりうる危険性を内在させている」のもっともである。しかしながらまた一方で、純粹自然保護者からみれば変質した国立公園も、人間が作り出した他の文明の産物と比べるとはるかに人類の健全さを証明するものであるように思われる。実際のところ、絶滅したオオカミがイエローストーン国立公園に放たれたことは、国立公園政策上で画期的なことであった。

国立公園とアメリカ先住民の問題に関しても同様である。イエローストーンやヨセミテにも見られたように、先住民を排除して国立公園が設置されたのは事実だが、20世紀になって先住民の文化遺産を保護する国立公園が設置されたのも忘れてはならないと思う。アメリカ先住民に対するミューアの姿勢は、ソローなどと比較するとアンビヴァレントである。彼のキリスト教的な性格が原因かもしれないが、先住民を完全否定しているわけではない。

第8章、中島美智子「カリフォルニアのユートピア——スタインベック『天の牧場』から『怒りの葡萄』へ——」は、*The Environmental Justice Reader*に収められたリード「環境正義エコクリティシズムへ向けて」を引用しながら、人種と階級という環境正義の視点が欠けていた従来のエコクリティシズム研究に反省を迫るものである。ここにきて日本でも環境正義（「全ての人々が健全な環境によってもたらされる恩恵を平等に分ち合う権利」）が正面から論じられるに到ったのは喜ばしいことである。

筆者はスタインベックの作品に注目し、彼が「カリフォルニアを舞台に人種や階級が交錯するアメリカ社会の葛藤の狭間に揺れ動く貧困階級の苦闘」を取り上げて、『天の牧場』や『怒りの葡萄』を書き上げたことを高く評価する。なお筆者が最後にスタインベックの『チャーリーとの

旅』から引用した「なぜ進歩というものは、こんなにも破壊に似ているのだろうか？」という言葉が、余韻としていつまでも心に焼きついている。

第9章、松永京子「汚染の言説から多様性の言説へ——ルース・L・オゼキの小説と環境正義——」は、ポストレイチェル・カーソンの作家として日系のオゼキに焦点をあてる。汚染の言説を扱った作家としては、ウィリアムスやスタイングレイバーがよく知られているが、オゼキもアメリカの環境文学の伝統に確固とした位置を占めている。最後に筆者はオゼキの言葉、「変革への第一歩は、信念というラディカルな行為を遂行することのできる想像力」、「希望を想像することができなければ、それを実現することも不可能である」を引用して、環境的想像力の重要性を力説する。まさに環境的想像力の欠如こそ現代文明の病であり、オゼキたちの訴えに耳を傾けることから環境的想像力を養わなくてはならないと思う。

第10章、ジム・ターター 松永京子訳「さらに川下に生きて——癌、ジェンダー、環境正義——」は、環境正義文学研究の先駆けとなったアダムソン他編 *The Environmental Justice Reader* に収められている1編の翻訳である。学術論文というよりはスカラリー・ナラティヴに属するこの論考で、ターターはエピグラフとしてスタイングレイバー『レイチェルの娘たち——乳癌の原因を探して』から「私は自分をレイチェルの娘だと思っている」を高らかに掲げている。癌と環境汚染をテーマに、自己、知人、姉の癌体験を織り交ぜながら語るターターの語り口には、日本の研究者には見られない真摯な生き方が反映されている。同じ研究者として彼の個人的体験を消化吸収し、広く伝えていくことが我々に課せられた役割であることを痛感させられる。同様のことが次章スロヴィックの論にも言えることであり、本書の編者がターターとスロヴィックの個人的な体験から普遍的真理を語るナラティヴを掲載したことだけでも本書の価値は十分にあると思われる。

第11章、スコット・スロヴィック 中島美智子訳「ユッカマウンテンのように考える——ネヴァダ砂漠での美、有毒性、そして意味——」は、典型的なスカラリー・ナラティヴの範疇に属する。アメリカのネイチャーライティング研究ではすでに確立した手法である。筆者は核廃棄物貯蔵所予定地としてのユッカマウンテンを「もっと多様な視点から知らねばならない」という思いで語る。この地は「ユートピア的であると同時にディストピア」、核実験場があると思えば、デス・ヴァリー国立公園が隣接する。不滅のラスヴェガスがあるかと思えば、静寂と生き物であふれている。奇妙な取り合わせの地である。しかしレオポルドの有名な「山の身になって考える」から60年の歳月が経過してもアメリカ社会は一向に環境に目を向けない。「私たちの文化はエネルギーに飢えており……もし私たちの文化が違っていたら、ユッカマウンテンは存在しなかったであろう……国全体が、ユッカマウンテンについて学んでいない怠慢ぶりは、エネルギーの使用に関する共同体全体の無頓着さと符号しているように思われる」と語り、不遜な文明に異を唱える。ここですら「少しの努力、想像、誇りを持てば、太陽や風などの再生可能なエネルギーの世界中のモデルケースになれる」のに、いまだに行動に移さない社会に筆者の憤りは尽きることはない。

池末陽子・辻和彦 著『悪魔とハーブ エドガー・アラン・ポーと十九世紀アメリカ』

(音羽書房鶴見書店、2008年4月、209+46頁、本体2,800円)

林 康 次

序章を枕に、三部構成、全8章の『悪魔とハーブ』は20世紀を視野に収めた、ポー全体像構築への刺激的な試みである。本書評は池末陽子、辻和彦両氏の意欲的研究書の構造を概観し、三部における若干の問題を吟味する。

伝記的序章「ポーとその時代」で、ポー没前後の評価の差をアメリカの文脈で浮上させた後、第一部では、「短編作家の長い話」として3章がポーの長短に関わる矛盾の必然性解明にあてられている。『ピム』や『ロドマン』におけるポーと黒き人、ハイブリディティ意識や気球物語群などの議論でポーのアメリカに眼を開かされた読者は、第二部「昼の夢夜の夢」2章でもポー読解の新しさに導かれていく。4、5章では、自然と風景に一貫して潜む〈ユリノキ幻想〉の斬新な究明と「跳び蛙」論のエスニシティとオリエンタリズムからの鋭利な分析に出会う。第三部「鐘の音が聞こえる」で、読者は「悪魔とハーブ」と題した本書の意図を悟るに至る。6章は「ブラックウッド」と「ある苦境」両作と「市場」との関係性を、7章は「鐘楼の悪魔」の音楽性とポーのエスニックアイデンティティとの関係を論じ、最終章「幻想の音楽」でのポーと現代の意味の問いかけで本書は結ばれる。

(1) ハイブリディティ意識と気球とアメリカ

「白きモノ」が「黒きモノ」に対峙する恐怖の風景をポーは、ソローやエマソンの人道主義的立場からではなく、南部人として、「白黒反抗の恐怖」と捉えると同時に、「奴隷制依存型社会崩壊への警鐘」を打ち鳴らしもした。こうポーの黒きモノに対するアンビバレンスを分析する著者は、ポーの長編に示されたハイブリディティ意識から気球四部作に窺われるポーのもう一つのアメリカ像呈示の検討にまで広げ、「短編作家」と「長い話」との間を効果をめざした短編作家像ではえられぬ、アメリカの現実に肉薄したポー世界の奥行を詳細に論じた。

以上の長短の間隙を埋め、実像たるポーの全体像に迫ろうとする著者の姿勢の迫力は次の点にある。『ピム』と『ロドマン』における先住民表象問題把握の角度の差、辺境への凝視、四気球譚の一貫性と回帰性などに示されたポーの絶望と飛翔のメカニズムを委細を尽くした分析に託し、そこからめくるめくポー世界が的確に浮上してくる。しかし興味深い鋭い指摘にもかかわらず問題は残る。黒きモノへの人道的立場とポーの立場との比較や気球譚の科学と芸術の問題（ヴェルヌやメリヨンとポー）、さらに、気球、デモクラシー、『ユリイカ』間の内的関連などへの目配りによって、分析に、なお、研ぎをかけてもらいたい。

(2) ユリノキ幻想と体制派／反体制派ポー

都市作家／自然作家両像の後者側からポーの〈自然〉を根拠づけようとする著者は今まで不問に付されていた「ユリノキ幻想」に注目した。〈ユリノキ〉出現のポーの執拗な一貫性には著者が主張するようにポー幻想芸術にとって重要な意味が潜む。「妖精の島」における「羽の生えた

チューリップと見紛うばかりの数え切れない蝶」という幻想の端緒から「自然派」ポー最後の「ランダー」におけるユリノキの語りに及ぶポー想像力の展開を読み込んだ上での〈ユリノキ幻想〉の指摘は多様なジャンル間のポーにおける一なるものの指摘として重要である。

他方、「ホップ・フロッグ」の「辺境」を穿ったポーの眼識に「異質性／異端性」を認め、著者は、辺境へのポーの凝視に関して、マシーセンのアメリカ文学における「数少ない偉大な改革者」ポーと同調する。ここに体制的／反体制的ポーが同居する訳だが、この問題と〈ユリノキ幻想〉とポーのなかでいかに結びついているのか、さらに大きな問題を蔵しているのがポーという文学者なのである。私たちが幻想の起源を問う必要がある。こう分析するのも可能だろう。異質、異端のポーのゆりの木は、「アッシャー」の南部精神の破綻と館の崩壊と連なる王国における弱者による支配者への復讐という暗黒と作者のなかで絡まっていた。その暗い世界から逃れ、楽園への道を示したのがゆりの木であり、それを契機として、『ユリイカ』へとポーは破壊から創造へと向かうことができたのだ。眼と理想との間に木立を介して実現できたボードレールの照応世界同様、ポーもゆりの木の間から美／真を遠望した。ゆりの木の秘儀にポーが通じていたのは暗黒を知悉していたからだった。

(3) 文学の市場性と音楽性とアイデンティティ

奴隷制と文学界という制度とアメリカとに微妙に反応していたポーからは曖昧な作品が生れる。「ブラックウッド」と「ある苦境」一対は著者の指摘通り、奴隷制、文壇政治なる二つのポリティクスを「接合」させ、「分断不可能な異形の双生児」と直面するポーを語る。制度へのポーの反応には科学と時計のアメリカへのポーの嫌悪が重なり合う。「鐘楼の悪魔」論の正確な時計秩序に抗うフィドル／ハーブを抱える悪魔像の指摘に従えば、悪魔の音楽の主はアイリッシュ・アイデンティティの表出ということだ。

なるほど、著者が主張するように、ポーはアイデンティティのゆらぎのうちに、既成なる制度のアメリカとはちがうもう一つのアメリカを求め、ジャーナリズムと闘い、文学秩序と純粋芸術との間で微妙なバランスをとっていた。森と音楽、自然と人工との照応、グロテスクとアラベスクの接合の努力などポー世界の混成性は幻想性と形影の如く一体化し、もう一つのアメリカの必要を訴えている。アウトサイダー悪魔の音楽は超越主義者たちの身体なき思想を笑う。その悪魔の鏡の力は透明な眼球の明澄な世界を突き抜け、多様な暗黒を映し出す。その鏡からさまざまな混交／混血の双生児が生れる。ポーの世界は多面鏡のそれなのだ。ボードレールの鏡の執着と近代芸術は切り離すことができない。豊崎光一がボードレール／メリヨン、パリ／海、自然／人工における照応関係の展開のなかに鏡のオブセッションの問題を論じているが（「もう一つの海 雙児の海」）、ポーにもほぼ同じ事情が認められるのだ。ポーの気球「スカイラーク」号とメリヨンの気球「希望」号の各々の命名は近代における芸術の力を示唆している点大変興味深い。

以上、『悪魔とハーブ』の構造を概観し、三部の主眼点を挙げ、若干のコメントを付してきた。図式的に言えば、(1) 短編作家と長い話との矛盾、効果と現実との衝突 (2) 辺境への凝視とユリノキ幻想の二重性 (3) ポー—悪魔／芸術家／アウトサイダーと整理されよう。本書が問題にした諸要素はポーの全体像構築に寄与している。そこで、以下、本書に触発された限りで、全体像構築の試みの一環として第一に、『ピム』と『ロドマン』との間を、第二に、推理と庭園両ジャンルとの間を追究してみよう。その過程で、本書の意義は一層明らかになるだろう。

(4) ポーの混成性と幻想性——ポーの全体像構築へ

幻想と混成のポーをめぐって、『ピム』から『ロドマン』を辿る場合、環境に対し圧倒的な優位を示す自立する個人と宇宙との一体化を図ったエマソンに対する踵でひと廻りするポーを想定せねばならぬ。音楽的姿勢で絶望から真／美のコスモスへ進めたポーは『ユリイカ』以前からそのヴィジョンとの整合化の努力を続けていた。事実世界ではえられぬ熱望成就のため、文明の外へ出るポーの主人公たちには往路が重要であって、帰路はさほど問題にならない。ここに主人公と作者との共謀関係が認められる。『ピム』や『ロドマン』におけるアメリカの生でのメランコリーと文明からの逃避は『ユリイカ』に直結しているのだ。両作品間の整合性を果たすためには旅そのものが、往路が、発端のみが重要なのである。

ピムとピーターズの関係は、冒険の往路、プリンス・エドワード島、ボゼッション島、荒涼島など文明の悪を示唆する島々を通過する頃から、形影の如く、相互浸透作用が深まり、両者は夢の地へ進んでいく。ピムの幻想の旅は、先住民と敵対的なロドマンのそれとはちがひ、混血性ゆえに同一化可能なピーターズを道連れに、極地に達した。ピムとロドマンの差は「使いきった男」と「鋸山」の差でもある。先住民によって身体器官全部を失った将軍は、「ある苦境」のサイケータ同様、希望を体現する根拠たる身体をもたぬゆえに死の権威と無縁の存在になった。ベトローは死を享受できる身体があつてこそ、小春日和という季節の空位期間に、暗示の宇宙への鋸山冒険での死の旅を実現できた。ピム／ピーターズは後者の勇敢な肉体と死／メランコリーの熱望が混ざり合い、夢を果たすことができた。

かなたに希望への回路を求めた幻想は死を受け入れる身体を必要とするのだが、ポーの死の幻想は『ユリイカ』を予示する方向で設定されている。文明と自然との間を旅する作者のゆりの木の意図は、「黄金虫」では、黄金の謎への「関係」を指示し、「ランダー」では、風景と住まいとの間で理想的な「構成、構図、配置」を示唆することであった。かくて、ゆりの木は自然と文明との〈間〉にあつて、夢の実現を強く促す幻想の木の働きとし、それを発見できる者は幻想の秘儀に通じている者なのだ。ピム／ピーターズの幾度も死体験が白い巨像に近づくことを可能にしたように、幻想の木に近づくには死の回路が必要なのだ。

以上の補足は〈大海〉を前にした〈灯台〉としてのポー文学の全体像構築へのきっかけに過ぎない。大変に新鮮な労作であり、好著である本書をもっと綿密に読み、今後もポー研究を続行していく所存である。

編 集 後 記

『中・四国アメリカ文学研究』（第45号）をお届けします。今回は7名の論文投稿希望者があり、編集委員会として最終的に受理した論文は4編でした。厳正な審査の結果、3編の採用となりました。今号の執筆者の氏名と所属機関は以下のとおりです。

杉 野 健太郎（信州大学）
栗 原 武 士（呉工業高等専門学校）
長 井 志 保（鳴門教育大学・院）
中 山 慶 治（松山東雲女子大学）
城 戸 光 世（北九州市立大学）
藤 吉 清次郎（高知大学）
上 田 みどり（広島経済大学）
西 前 孝（岡山大学）
上 岡 克 己（高知大学）
林 康 次（愛媛大学）

英文校閲は Ian Willey 氏（香川大学）に依頼しました。今年度の編集委員は次のとおりです。

横 田 由 理（広島国際学院大学）
新 田 玲 子（広島大学）
藤 本 幸 伸（山口大学）
松 島 欣 哉（香川大学）

次号は2010年6月に発行の予定です。会員の皆様からの多数のご投稿をお願いします。投稿希望のご連絡は、e-mailでも受け付けます。編集責任者（matusima@ed.kagawa-u.ac.jp）または事務局までご連絡下さい。また、過去一年間に会員が関わって出版された研究書等のなかで、優れたものの「書評」を掲載しますので、事務局と編集責任者までご献本をお願いします。

44号以降の会誌の内容はすべてPDF化し、ホーム・ページで公開しています。43号までの会誌については、目次のみ公開しています。ご活用下さい。

会員が所属される機関等で、会誌に掲載された論文等を公開される場合（個人のホーム・ページを含む）は、必ず、PDF化した会誌の紙面を用い、当該論文等が掲載された会誌の号数を明示して下さい。公開に際して、事務局へのご連絡は不要です。なお、著作権は、執筆者本人と中・四国アメリカ文学会に帰属するものとします。

(M.K.)

投稿規程

1. 枚数：(a)日本文の場合は400字詰横書き原稿用紙に30枚以内。ワープロ等を使用の場合は、A4判用紙に横書きで30字×30行とし、14枚以内。これとは別に必ず英文のシノプシス（約500語）をつけること。
(b)英文の場合はA4判用紙に65字×25行とし、20枚以内。ワープロを使用のこと。
2. 体裁：注をつける場合は、後注（Endnotes）とし、本文の終わりにまとめ、引用文献（Works Cited）を付すこと。本文中の引用の仕方、英文シノプシスおよび英文原稿のスタイルに関しては、日本アメリカ文学学会の会誌『アメリカ文学研究』の投稿規定（『MLA英語論文の手引き』第6版）に準じる。
3. 締切：2010年1月10日 期限厳守
4. 宛先：〒761-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部 松島欣哉
5. 提出部数：5部（コピー可）。5部のうち1部にのみ、論文表題と投稿者氏名（ふりがな）、現住所（郵便番号）、電話番号、所属を記した表紙を付し、すでに口頭発表した旨の注記や謝辞なども表紙に付すこと。他の4部は表紙を付さず、第1ページは表題と本文のみとし、以降も投稿者氏名を記さないこと。
6. その他：投稿ご希望の場合は、2009年10月末日までに、(1)論文タイトル、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所（TEL）を、葉書で上記4の宛先までご一報ください。
提出された原稿は返却しない。採用決定後、フロッピーディスクを提出すること。その際、機種名、ソフト名を論文タイトルと合わせて明記すること。尚、掲載論文1篇につき2万円の執筆分担当金を初校時に請求します。

「シンポジウム報告」執筆要領

1. 年次大会のシンポジウムを『中・四国アメリカ文学研究』に「報告」として掲載する。
2. 内容：会報に掲載される「要旨」とは異なり、発表時点の内容を反映させるもので、プロシーディングに準じる。
3. 形式：シンポジウム全体のタイトル、コーディネーターによる「まえがき」、および各発題者の個別のタイトルと報告の順序で構成し、発題順を掲載順とする。尚、シンポジウムで発表したものが本会誌に論文として掲載されるときは、「まえがき」にその旨を記して、その発題者の「報告」は割愛する場合もある。
4. 文字数および体裁：『中・四国アメリカ文学研究』の投稿規程に準じ、原稿の1頁はA4横書き（30字×30行）とする。ただし、「まえがき」と各報告の原稿枚数は「注」と「Works Cited」を含んで、それぞれ5枚程度。英文シノプシスは不要。
5. ハードコピーおよびフロッピーディスクの提出：コーディネーターは各発題者の原稿を集約し、ハードコピーを4部提出すること。編集委員会で確認後、（必要があれば修正を施した）フロッピーディスク（タイトル、機種名、ソフト名を明記したもの）を提出する。尚、編集責任者との間で了解が得られれば、コーディネーターは完成原稿をEメールの添付ファイルとして編集責任者に送信しても構わない。ハードコピー提出の締切は会誌の投稿規程に準じ、毎年1月10日とする。
6. 執筆分担当金を支払う必要はない。

ISSN 0388-0176

中・四国アメリカ文学研究 第45号

2009年6月1日 発行

編集兼発行者	中・四国アメリカ文学会
発行責任者	林 康 次
編集責任者	松 島 欣 哉
事 務 局	神戸女子大学文学部 吉岡研究室 〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1 Tel & Fax : 078-737-2455 e-mail : yoshioka@suma.kobe-wu.ac.jp URL : http://www.chushi-als.org
印 刷	株式会社 美巧社 〒760-0063 高松市多賀町1-8-10 Tel(087)833-5811 Fax(087)835-7570

Chu-Shikoku Studies in American Literature, No.45

Edited, published, and distributed by
The Chu-Shikoku American Literature Society
Executive Office : Department of Literature (c/o Prof. Yoshioka)
Kobe Women's University, 2-1 Aoyama,
Higashisuma, Suma-ku, Kobe 654-858 Japan
Tel & Fax : 078-737-2455
e-mail : yoshioka@suma.kobe-wu.ac.jp
URL : <http://www.chushi-als.org>

Chu-Shikoku
Studies in American Literature

No. 45

June 2009

The Chu-Shikoku American Literature Society